幾世紀間も慣れて來た結果、彼等は彼等自らの網にひつかかり、その思ひつきの由來を忘れてしまつた。今や彼等自らが男子等よりも以上に欺かれてゐる。そして其爲めに、殆んど必然に各の婦人の生活へ入るべき幻滅に於ても、またより多く苦むのである——とにかく彼等が一般に、欺いたり欺かれたりし得べく、十分の想像と悟性とを有する限りに於て。

四一六

婦人の解放。——婦人等は、彼等が愛することに、直に同感したり反感したりすることに左樣に慣れてゐるとき、そもそも正當であり得るか？　右の理由から彼等はまた、事柄に對してより希に、人間に對してより多く興味を感ずる。しかしながら彼等が事柄に興味を感ずるならば、彼等は直ぐにその黨人になり、それによつて純粹無垢な効果を汚してしまふ。かくて、彼等に政治だとか、科學上の特殊の部分だとかが委ねられる(例へば歴史などが)とき、少からぬ危險を生じて來る。なぜと云つて、科學の何物なるかを本當に知つたところの婦人より、何物がそもそもより希であつたか？　加之、彼等の最も傑れた者共は、その胸中に科學に對する內々の侮蔑を抱いてゐる——あだかも彼等が何等かの物によつて科學にまさつてでもゐたかのやうに。思ふにかうしたすべての事は變つて來るかも知れない。けれども當分のところはかうである。

四一七

婦人の判斷に於けるインスピレエション。——婦人等が爲すのを常とする、肯定否定についてのそれらの急激なる決定は、彼等の痙攣的な好惡によつて引き起された、人格的關係の電光的な照耀は、云ひ換へれば女性的不正の證據は、戀をするところの男子等から、一の榮光を以てとり圍まれた——あだかもすべての婦人等が、デルフィイの大釜や月桂の冠なしにも、智慧のインスピレエションをもつてゐたかのごとく。そして彼等の發言は、その後長い間、神聖的詮宣のごとく解釋され提示される。しかしながら、各の人に對し、各の事に對して、何物かがそれに都合よく言はれること、しかしながら同樣によく何物かがそれに都合惡くも言はれること、すべての事物がただ二面的なものでなく、むしろ三面的四面的なものであることを考へれば、かくのごとき突然の決定に於て全然捕へそこねてしまふと云ふのは、殆んど困難な事である。げに人は言ふことが出來た——事物の本性は、婦人がいつでも正しきを失はないやうな具合に出來てゐるのだと。

四一八

愛せられる。――二人の愛人の中の一人が通例愛する者であり、今一人が愛せられる者であるところから、各の戀愛事件には愛の恒常的限度があるのだと云ふ信仰を生じた。そして一人が、それをより多く獨占すればするほど、いよいよ今一人の分はより少くなると云ふ信仰を生じた。例外として二人の中の各の虛榮心が、愛せらるべきものの自分であると云ふことを、思ひ込ませる場合もある。すると、二人とも愛せられようとねがふわけである。それからしてさまざまの半ば滑稽な、半ば馬鹿馬鹿しい光景が起つて來る――とり分け結婚した男女の間に於て。

四一九

女性の頭の中の矛盾。――婦人は客觀的であるよりも、左樣により多く主觀的である故に、彼等の思想の世界には、論理的に相矛盾するところの傾向が雜居してゐる。彼等は順次此等の傾向の代表者等に熱中し、その系統を一括して攝取するのを常とする。しかも、あとで一の新しき人格が覇を稱するほどのいかなる處にも、一の死んだ場所を生ずると云ふやうな鹽梅に。恐らく、ある老婦人の頭の中なる哲學全體は、かくのごとき死んだ場所のみで出來上つてゐるかも知れない。

四二〇

誰がより多く苦むか？――ある婦人とある男子との間なる、個人的な不和爭鬪ののち、男子の方は相手を傷けたと云ふ觀念から最も多く苦められ、婦人の方は相手を十分に傷けなかつたと云ふ觀念から最も多く苦められる。それ故、――彼女は涙や、むせび泣きや、とり亂した顏つきなぞによつて、その上にも相手の心を重くるしくしようと努める。

四二一

女性的の宏量にまでの機會。――もしも我々が慣習の要求を思想に入れないならば、我々は、自然と理性とが人間に、順次幾通りもの結婚を示唆するのではないかしらと考へるかも知れない――卽ち、彼はまづ二十二三の年に年上の女と結婚する。その女は理智的にまた道德的に彼にまさつてゐる。そして二十代の危險（功名心だとか、憎惡だとか、自己侮蔑だとか、あらゆる種類の欲情だとか云ふ）を通じて彼の指導者になり得るのである。この女の愛はその後全く母の愛になつてしまふであらう。そ

して彼女は、彼が三十代になつて全く年若な女(その教育は彼自身の手でやる)と一緒になつたとき、ただにそれに堪へるだけでなく、最も深切にそれをはかどらせるであらう。結婚は、二十代の者にとつて必要な制度である。三十代のものにとつては有用な、しかしながら必らずしもあることを要しない制度である。のちの生活に對しては、結婚はややもすれば有害になり、男子の精神的退化をはかどらせる。

四二二

幼時の悲劇。——高貴にして向上的なる人々が、その幼時に於て彼等の最も苦しい闘をたたかはねばならないのは、恐らく希らしいことであるまい。——たとへば、彼等が考の低劣な、體裁とごまかしとに溺れたる父に對して、彼等の意見を通さねばならなかつたり、或は、バイロン卿のごとく、子供らしく怒りつぽい母と絶えず爭はねばならなかつたりすることによつて。かくのごとき經驗をへて來た人は、その一生を通じて、誰が實際に彼の最も大きな、最も危險な仇敵であつたかを忘れ去ることが出來ないであらう。

四二三

親馬鹿。——ある人間の批判に於ける最も大なる誤謬は、彼の兩親から爲される。これは一の事實である。しかしながら、それは如何にして說明すべきか？　兩親はその子供についてあまりに多くの經驗をもち、もはやそれを統一しきれなくなるのであるか？　外國を旅行する人々が、ただ彼等の滯留の初期に於てのみ、ある國民の一般的特徵を正當に捕捉すると云ふことは、注意されてゐる。彼等がその國民をより多く知れば知るほど、いよいよ彼等にはその國民に於ける類性的なものと特色的なものとが分らなくなつて來る。彼等が近視的になるや否や、彼等の目は遠視的なることをやめる。されば兩親は、彼等がその子供から十分に遠く立たなかつた故に、その子供について間違つた批判をせねばならないのか？　次ぎの說明はまるで異つた說明である。曰く、人々は彼等を圍繞する手近のものについて、もはや省察をしないで、むしろただ受け入れる丈けのことをするに慣れて來る。思ふに兩親の慣習的無思慮こそ彼等が一たび其子供について批判すべく餘儀なくされるとき、左樣に間違つた批判をする所以であらう。

四二四

結婚の將來。——女性の教育と向上とを任務とするところの、それらの高貴な、自由な考をもつた婦人等は、一の見地を看過してはならぬ。最高の體貌に於て考へられたる結婚は、性を異にした二人の間の靈的交情としての結婚は、從つて將來に於て希望されるごとく、一の新しき時代の產出と教育とを目的としてなされたる結婚は、——肉感的なものを謂はばただ、一のより大なる目的に對する希な、折々の手段としてのみ用ふるやうな結婚は、恐らく(それが氣違はれねばならぬごとく)一の自然なる幇助者を、蓄妾を要するであらう。なぜと云つて男子の健康にもとづいて、妻が男子の性的要求の單なる滿足のためにも盡すべきであるならば、妻の選擇に際して既に、上述の目的に反對の、間違つた見地が勢力を張つて來るであらう。乃ち子孫の產出は偶然になり、その幸福な教育は甚だ怪しいものになつて來る。友人であり、幇助者であり、產婦であり、母であり、主婦であり、家政家であるべき善き妻は、また恐らくは、その夫から別になつて、自分自身の仕事や役目を果さねばならない善き妻は、同時に妾でもあり得ない。それは一般に、あまりに多くを彼女から要求してゐるのである。されば將來に於ては、ペリクレスの時代にアテンにあつたところのものの正反對が起つて來るかも知れない。あの時分の男子等にとつて、その妻は妾とあまり異はなかつた上に、尙ほ男子等はアスパシアの方へ心をむけた。なぜならば彼等は頭と胸とを自由にするやうな相手の魅力——婦人の愛嬌及び精神上のしなやかさのみが與へ得るごとき——を願望したからである。あらゆる人間の制度は、丁度結婚のごとく、實際的理想化のほどほどなところをのみ許す。でなければ、直ぐに手荒な治療が必要になつて來る。

四二五

婦人のシュトゥルム・ウント・ドゥラング時代。——歐羅巴三四の文明國に於ては、幾世紀かの教育を以てすれば、我々の欲するままに如何なるものでも婦人から作ることが出來る。男子をさへも作ることが出來る——勿論性的の意味に於てではないが、そのほかのあらゆる意味に於て。彼女等はかくのごとき影響の下に、あらゆる男性的の德と强さとを收得したであらう。その代りには、男性的の强さと惡德とをもとらざるを得なかつたであらう。前にも言つた通り、我々はそれ丈けのものを强ひることが出來る。しかしながら我々は、それによつて招致されたる中間情態を如何にして堪へるであらうか？——その情態は恐らく二三世紀も繼續するかも知れない。そしてその間女性的の愚劣や不正は、

婦人の當初の天賦は、それまでに獲得されたすべての物の上に優勢を把持して行くであらう。これは、怒が本當に男性的な欲情をなすべき時代であらう。けだし、すべての藝術や科學は前例のないディレッタンディズムスによつて漲らされ、息づまらせられ、哲學は頭を變にしてしまひさうな饒舌によつて死ぬまで談され、政治は前よりも一層空想的、黨人的になり、社會は全然解體されてゐたであらう。なぜならば、舊慣の保存者等が自分自身にまで滑稽になり、各の關係に於て彼等自らを慣習の外へ置かうと努力したからである。げにもし婦人等が慣習の中に彼等の最大の力をもつてゐたならば、彼等が慣習をすてたのち、力の同じ豐富をとり返すべく、彼等はいづこへ手をのばさねばならぬであらうか？

四二六

自由思想家と結婚と。――自由思想家は婦人と共に生活するであらうか？　一般に私は思ふ、彼等は古代の預言する鳥のごとく、現在の眞實を考へる者、眞實を語る者のごとく、ただひとり飛ぶ方を撰ばねばならぬと。

四二七

結婚の幸福。――我々の慣れたるすべての事物は、いよいよより緊くなるところの蜘蛛の網を我々の周圍に引きはえる。そして直に我々は認める――絲が網になつたことを、また我々自らが、ここに捕へられて、自分自身の血を糧にしなければならぬ蜘蛛として、その眞中に坐つてゐると云ふことを。乃ち自由精神はすべての慣習や規則を、すべての持續的限定的なものを憎む。乃ち彼は苦痛を忍んで、自己の周圍の網をいくたびか引き裂く――そしてその結果として數知らぬ大小の傷を負はうとも。なぜと云つて彼はあの絲を彼自身から、彼の體や、彼の魂から引きちぎらねばならないから。彼、は彼がこれまで憎んでゐたところに愛することを學ばねばならぬ。また、彼がこれまで愛してゐたところに憎むことを學ばねばならぬ。げに、彼が前に彼の幸福の寶角を撒きちらしたところのその同じ畑に、龍の齒を播くことが、彼にとつて何等の不可能ならぬ事であらねばならぬ。これからして、彼が結婚の幸福に適してゐるや否やは推定される。

四二八

あまりに近く。――我々がある人間とあまりに近く生活してゐるならば、それはあだかも我々が、一の善き版畫をいつも手にとつてゐるやうなものである。いつかは、その紙がきたなく汚れて破れて

來るばかりだ。ある人間の魂も、絶間なく扱はれてゐる内にはつひにすきへらされる。少くとも、それは我々にまで遂にさう見えて來る。我々は二度ともうその本來の輪廓や美しさを見なくなる。我々はいつも婦人や友人との、あまりに親近な交際によつて失ふところがある。そして時としては、それによつて我々は我々の生命の眞珠をもなくしてしまふ。

四二九

金の搖籃。——自由思想家は、婦人等が彼をとりまくときの、あの母のやうな心配りやお守をふりすてるべく遂に決心した場合、いつでもほつと息をつくであらう。彼の上にあんなにも心配して防がれたるより荒き風は、そもそも如何なる害をなすか？　多少なり彼の生活にあるところの現實の不利益や、損失や、災難や、疾病や、過誤や、惑溺なぞの結果が何であらう？——金の搖籃や、孔雀の羽の扇の束縛に比べては、またその上に、彼が乳呑兒のごとくかしづかれ甘やかされたからと云つて、それをありがたく思はねばならぬと云ふ壓抑的な感情に比べては。だから、彼をとりまく婦人等の母のやうな心持が差し出す乳は、左樣にたやすく胆汁に化してしまふのである。

四三〇

自ら進んで出るところの犧牲。——重要なる婦人等は、何物によつても彼等の夫等の生活を左樣に輕くしない（夫等にして高名であり偉大であるならば）——婦人等が謂はばほかの人間共の一般的不人氣や折々の不機嫌をいれる容器になると云ふことによつてのごとく。同時代の人々は彼等の偉大なる人々の上に多くの過失や、愚劣や、加之ひどい不正の行爲をすら看過するのを常とする——彼等が彼等の心情の輕減にまでの本當の犧牲として虐待し殺戮し得べき、何人かをさへ見出すならば。妻がこの犧牲にまで自分を供すべく功名心をもつことは希でない。そしてそのとき夫は勿論甚だ滿足に感ずることが出來る。乃ち彼が——かくのごとき自發的な電光雷雨を彼の近くに落ちしめるべく、十分に利己主義者であるならば。

四三一

心持のいい反對者。——靜かな、規則正しい、幸福な調子の生存や交際に對する、婦人共の本來の偏向は、生活の海の上に及ぶ彼等の油のごとき、鎭靜させるところの影響は、知らず知らず自由思想

家のより英雄的な内的衝動へはたらいて來る。それを知らないで婦人等は、散策してゐるところの鑛物學者に對し、彼がその足をぶつつけないやうにとて、道から石をとり去つてしまふ――彼は丁度それにぶつつかる爲めにとて出て來たのに――やうなことをする。

四三二

二の協和音の不協和。――婦人等は奉仕しようとねがふ。そしてその内に彼等の幸福を見出す。自由思想家は奉仕されることをねがはない。そしてその内に彼の幸福を見出す。

四三三

クサンティッペ。――ソクラテスは彼の要したごとき妻を見出した。しかしながら彼も、彼女を十分によく知つてゐたならば、彼女を求めなかつたであらう。彼の自由精神の英雄主義とても、そこまで行かなかつたであらう。事實としてクサンティッペは彼をいよいよ彼に固有なる天職にまで逐ひ込んだ――彼女が彼にまでその家庭を非家庭的に、面白からぬものにした故に。彼女は街上に、またお喋りをしたりのらくらとしたりしてゐられる限りの、いかなる場所にでも生活することを彼に敎へた。そしてこれによつて彼を、アテンの最も大なる、街上の辯證家――その辯證家は遂に自分自らを、ある神樣がアテンと云ふ美しい馬の休息しないためにとて、その頸に置いたところの虻にたとへねばならなかつた――にまで仕上げた。

四三四

將來に對して盲目。――丁度母親達がその子供達の、目に見え感覺に感じられる苦痛に對してのみ、本當に目や感覺を有してゐるごとく、高くのぼつて行かうとする男子等の妻等は、彼等の配偶者等が困苦し、窮迫し、侮辱されてゐるのを見ることに堪へられない。――思ふにかうしたすべてのものは、彼等の生活態度の正しき撰擇を證據立てるのみならず、また實に、彼等の大なる目的がいつかは到達されねばならぬと云ふことの保證でもあるのだらうけれど。婦人等は内々つねに、その男子等の高尚なる魂に對して陰謀を企ててゐる。彼等は苦みのない安樂な現在のために、彼等の將來をごまかしてしまはうとする。

四三五

權力と自由と。――いかに高く婦人等がその夫等を尊敬しようとも、尙ほ且つ彼等は社會から承認された力や觀念を一層尊敬する。彼等は數千年來、すべての勢力あるものの前に身をかがめ、胸に兩手を束ねてついて行くことに慣れてゐる。そして公の權力に對するすべての反抗を非認する。さればは彼等はその意向なしに、むしろ本能からのごとく、自由思想的な獨立不羈な努力の車輪に制輪としてからまりつく。そしてある場合には、彼等の良人等をこの上もなく苛立たせる――とり分けその良人等が、彼女等に實際そんな事をさせるものの、愛であると云ふことを思ひ知る場合に於て。婦人等の手段を非認しつつも、その手段の動機を寬大に尊敬する、これが男子の本性であり、またかなり屢々男子の絕望である。

四三六

Ceterum censeo.（譯者註――しかし、私の意見は）――文無しの社會が相續權の廢棄を布告したならば笑ふべきである。そして、子供の無い者共がある國の實際的立法に働くならば、同じやうにまた笑ふべきである。彼等はけに將來の大海を安全に渡航し得べく、十分の重荷を彼等の船の中にもつてゐない。しかしながら、最も廣い認識と生存全體の評價とを自分の使命として撰んだ人間が、ある家族に對する、扶養や、保護や、妻子の世話などに對する個人的な顧慮に苦められるならば、また彼の望遠鏡の前に、遠き星の世界からの僅かな光線が辛うじて貫き得るやうな、暗いエエルを張り渡すならば、同じく馬鹿馬鹿しいことであるやうに見える。かく私も、非常に哲學的な事柄に於ては、すべての結婚者等が疑をさしはさまれると云ふ說に贊成する。

四三七

最後に。――そこには失鳩答のいろいろの種類がある。そして通例運命はこの毒の盃を自由思想家の唇に置くべく機會を見出す――世間のすべての人々が言ふごとく、彼を『罰する』ために。そのとき婦人等は彼について何を爲すか？　彼等は啼泣し、悲歎する。そして恐らくはその思想家の日沒的安靜を擾すであらう――彼等が獄に於てなしたごとく。『おお、クリトンよ、誰かにこの婦共を連れ去らせよ！』とソクラテスは遂に言つた。

第八部

國家に對する一瞥

四三八

發言を要求する。——煽動者的性格と、民衆に働きかけて行かうと云ふ意圖とは、今日あらゆる政黨に共通である。それらの政黨はいづれも皆、上述の意圖の故にその主義を大なる戸外の愚劣に變へ、かくしてそれを見世物にすべく餘儀なくされてゐる。これにはもはやその上を變へられない。全くのところ、それに對して一本の指を擧げるさへも餘計な事である。なぜと云つて、ここにはヴォルテエルの言葉があてはまる。曰く、quand la populace se mêle de raisonner, tout est perdu（民衆が議論し出せば、すべてのものが失はれる）と。これが起つて以來、我々は新しき條件に順應せねばならぬ——一の地震が土地の舊い境界や周圍を移し、所有物の價値を變へたとき、我々が順應せねばならないやうに。加之、一體にすべての政治に於て、出來るだけ多くの人間にまでその生活を凌ぎよくしてやると云ふことが問題であるならば、この出來るだけ多くの人間はつねに、凌ぎよき生活の如何なるものであるかを決定するかも分らない。もし彼等にして、此目的に對する正當な手段を見出すべき彼等の理智を信ずるならば、それを疑つて何になるか？　彼等は今彼等自らの禍福に對し鍛冶屋でありたいとねがふ。そして自己決定のかうした感情が、彼等の頭に隱されたり顯されたりする五六の觀念に對する誇りが、實際彼等にまでその生活を左樣に愉快にする——彼等が彼等の褊狹の恐ろしき結果を悅んで我慢することほど——ならば、あまり反對するがものはない——彼等の褊狹が、あらゆるものの此意味に於て政治になるべきこと、各のものの斯樣なる標準に從つて生きかつ働くべきことを要求するほどに甚だしくないものとして。けだし先づ、ある人々には政治から離れて居り、少しく傍へよつて立つと云ふことが、前よりも以上に許されねばならぬ。彼等はこれにまで、自己決定の樂みからも驅り立てられる。そしてあまりに多くの者共が、或は一般にただ多くの者共が談るとき、沈默すると云ふことに、一の小さな誇りがまた結びつくかも分らない。そのときこの小さな群は大目に見られねばならぬ——彼等が多くの者共（ここでは國民だとか、人口の層だとかの意味にとられていい）の幸福をそれほど重く見ず、そして折々皮肉な顏つきに責を負うてゐるならば。なぜと云つて、彼等の眞面目さはどつかほかにあり、彼等の幸福は別の觀念であり、彼等の目的はやつと五本の指をもつ各の不器用な手によつて計られないからである。最後に——彼等にまでたしかに最も困難に承認されるのだが、とにかく承認されねばならない——時としては、彼等がその沈默の孤獨をぬけ出して、彼等の肺臓の强さを今一度ためす瞬間が來る。そのとき彼等は、森の中へ迷ひ込んだ者共のごとく、互に知らせ合ひ、勵まし合ふ爲めに聲をかけ合ふ。それによつて勿論、きかせるつもりでない耳にまで氣味惡く響くとこ

ろのさまざまな物が聞えるやうになる。しかし間もなく森の中は再びしんとする。森の中や、上や、下に住んでゐる數知れぬ蟲の唸りや羽ばたきが、再びはつきりと聞えるほどにしんとする。

四三九

文明と階級。――より高き文明は、二の異つた社會階級の存するところにのみ成立し得るものである。二の階級とは、働いてゐる階級と、なまけてゐる階級、本當になまける資格をもつた階級とである。或はより力强く表白すれば、强制勞働の階級と自由勞働の階級とである。幸福の分配と云ふ見地は、より高き文明の產出が問題になるとき大切でない。しかしながら兎に角、なまけ者の階級は、より多く苦みを感じ易く、より多く苦んでゐる。生存に對する彼等の逸樂はより少く、彼等の仕事はより大きい。今この二の階級の入れ代りが起つて、より愚鈍なる家族や個人が、上の階級から下の階級へ引き下ろされ、また一方では、下の階級のより自由なる人間が、上の階級へ近けるやうになるとする。そのときは、それを越えてはただ漠然たる願望の大海をのみ望見するやうな一の情態が來るであらう。かく舊時代の消え行く聲は我々に語る。しかしながら、これに聞くやうな耳が尙ほどこにあるか？

四四〇

善き血統について。――善き血統の男女等が他の男女等よりも餘計に所有するところの、そして、より高く評價さるべき疑ひもなき權利を彼等に與へるところのものは、遺傳によつていよいよ高められたる二の技術である。命令し得ることの技術と、自尊の心をもつた服從の技術とである。今や、命令が日常の仕事である（大なる商工業の世界に於けるが如く）やうな如何なるところにも、『善き血統の』それらの家門に似たる或るものが生じてゐる。ただ服從に於ける高貴なる態度だけは缺けてゐる。そしてそれは、封建制度からの相續物であり、もはや我々の文明の土には育ちかねるものである。

四四一

從屬。――軍人や官吏の社會に左樣に高く評價されてゐる從屬といふことは、やがて我々にまで、丁度ゼスキットの祕密の戰術が既になつてゐる如く、信じがたきものになるであらう。そしてこの從屬が最早可能でなくなる時、最も驚嘆すべき効果の一群はもはや到達されないであらう。そしてこの世界はより貧しくなるであらう。それは消え失せねばならぬ。なぜと云つてその土臺が、卽ち、絕對

の權威に對する、究竟の眞實に對する信仰が消え失せつつあるのだから、軍人の社會に於てさへも、肉體の拘束はそれを產出すべく十分でない。むしろ何等か超人的なものに對するごとく、君主的なものに對する遺傳の憧憬だけがそれをなすに足るのである。より自由なる情況の下にあつては、人々はただ條件にのみ從屬する——相互契約に從つて、それ故利己のあらゆる但書を以て。

四四二

國民軍。——今日左樣に稱贊されたる國民軍の最も大なる不利益は、最高の文明をもつた人間の浪費に存する。そもそも彼等はあらゆる情況の都合よく行つたことによつてのみ存在してゐる。我々が彼等と交涉する場合、いかに用心深く氣をつけてやらねばならぬことぞ——なぜと云つて、かくも精かに組織されたる頭腦の產出に、偶然の條件となるものを拵へる爲めには、隨分長い歲月が必要であつたのである！　しかしながら希臘人が希臘人の血の中を狂ひ廻つた如く、歐羅巴人は今や歐羅巴人の血の中を狂ひ廻つてゐる。そしてけに相對的に云へば、犧牲にされるのは大抵いつでも、大に敎育されてゐる者共である。豐富な、優秀な子孫を約束するところの者共である。けだしかくの如き者は、命令者として戰鬪の眞前に立つ。その上彼等のより高き功名心の故に、大抵の危險に彼等自らをさらすのである。祖國（Patria）と名譽（Honor）とよりまるで異つた、そしてより高き任務の委ねられる今日にあつては、お粗末な羅馬風の愛國心は、何等か不名譽なものである、或は時勢おくれの徵證である。

四四三

希望と僭越と。——我々の社會的秩序は、前のすべての秩序がなしたごとく、徐に融け去るであらう——新しき意見の太陽が新しき熱を以て人間の上を照らしたや否や。我々はそれの希望の中にこの融解を願望し得るにすぎない。そして我々及び我々にひとしき者共が、現存の事物の代表者等よりも、頭や胸に於てより多くの力を有することを信ずるときにのみ、理性的に希望することが出來る。されば通例此希望は一の僭越、一の買ひかぶりであらう。

四四四

戰爭。——戰爭を難じて云へば言ふことが出來る、それは勝利者を馬鹿にし、敗北者を意地惡にするものであると。戰爭をひいきにして云へば言ふことが出來る、それは上述のこの結果に於て野蠻に

し、それによつてより自然にするものであると。戰爭は文明にとつて睡眠時間、或は冬籠りの季節である。人間は善惡にまでより力强くなつてそれから出て來る。

四四五

君主に仕へて。――ある政治家は、全然顧慮なしに行動し得べく、自分自身の爲めにでなく、むしろある君主の爲めにその事業をやることが最も善い。かうした一般的な無私の光輝は、觀客の眼を眩惑させるであらう。そして政治家の事業が齎らすところの詭計や酷薄を見ないでゐるだらう。

四四六

權力の問題であつて、權利の問題でなく。――各の事項についてより高き功利を眼中に置くところの人々にとつては、社會主義なるものには、もしそれが實際に數世紀の間壓迫され蹂躙されてゐた者共の、彼等の壓抑者に對する反抗であるならば、權利の如何なる問題もなく(『如何なる程度まで我々はその要求をゆるすべきか?』と云ふ、滑稽な、意氣地のない問題があるにもかかはらず)、むしろただ權力の問題があるだけである(『如何なる程度まで我々はその要求を利用し得るか?』)。されば自然力の場合、例へば蒸氣の場合などと同じである。――蒸氣は器械の神樣として、人間からその用をつとめるべく强ひられてゐる。或はその器械に間違でもあれば、卽ち、それを拵へ上げる人間の計量に間違でもあれば、器械をも人間をもともどもに木葉微塵にしてしまふのである。この權力の問題を解く爲めには、我々は社會主義が如何に强いかを知らなければならぬ。如何なる限定を以てすれば、社會主義が今日の政治的器械に於ける有力の桿杆として尙ほ用ひられ得るかを知らなければならぬ。ある情況の下に於ては、我々はそれを强くすべく我々のなし得るすべてをなすべきであつたらう。各の大なる力に對しては――それが最も危險なる力であらうとも――人類はそれからして彼等の目的に對する一の道具を作り上げることを考へなければならぬ。この權力の間に、舊い力と新しい力との代表者共の間に、戰爭が起つたらしく思はれるとき、しかしながら、双方へのあり得べき最も大なる保存と便宜との賢き打算が、一の條約に對する欲求を生じさせるとき、そのときはじめて社會主義は一の權利を獲得する。條約なしには何等の權利もない。しかしながら今日までのところ、問題になつた領域には、戰爭もなければ條約もなく、從つて何等の權利もなく、何等の『當さに』もない。

四四七

最も小さな不正直の利用。――新聞紙の權力は、それにつとめてゐる各個人が、甚だ僅かにのみ束縛されて感ずると云ふ事實の上に成立する。彼は通例彼の意見を表白する。しかしながら時としてはまた、彼の黨派に或は彼の國の政治に、或は最後に彼自らに都合よくするため、表白しないでしまふ。不正直の、もしくは不正直な沈默（に過ぎないであらう）のかくのごとき小さな過ちは、その個人にとつてたいして堪へにくいことではない。しかし其結果は容易ならぬものである。なぜならば、此等の小さな過ちは多くの者共によつて同時に犯されるからである。彼等の中の各の者は自らに言ふ『かくも小さな奉仕のために、私はより善く生活する。私は私の收入を見出すことが出來る。かくのごとき小さな顧慮を缺ぐことによつて、私は私自らを不可能にする。』一行餘計に（恐らくは更に署名さへしないで）書いたり、或は書かなかつたりするのが、殆んど道德的にどうでもいい事のやうに見える故、金錢及び勢力を有する人間は、各の意見を公的なものにすることが出來る。大抵の人間が、些細な事に於て弱いものだと云ふことを知つてゐる、そして、それによつて彼自身の目的を達しようとする人間は、つねに危險なる人間である。

四四八

慨歎に於けるあまりに聲高き調子。――ある困厄の事情（例へば政治上もしくは學問上團體に於ける紀綱の弛廢だとか、收賄だとか、えこひいきだとか云ふやうな）が甚だしく誇張して表現されると云ふ事實によつて、その表現は聰明な人々の間にその効果をなくしてしまふ。しかしながらいよいよ強く不聰明な人々（彼等は愼重なる、適度の記述に對しては無頓着でゐたであらう）の上に影響を及ぼすのである。ところで、後者は夥しく多數であり、またより強き意志や、より激しき行動欲を内に藏してゐる故、右の誇張は試驗や、刑罰や、約束や、再組織などの原因になる。この限りに於て、困厄の事情を誇張して表現するのは有用である。

四四九

政治界に於ける外觀上の天候製作者。――人々がかの、一日位前に天候を知つて、それを豫言するところの人間に對し、心ひそかに彼の天候を製作するものなることを假定するごとく、教育あり學問ある人々すらも迷信的信仰を發揮して、大なる政治家共にすべての重要なる變化や機會（彼等が局に當つてゐた間に起つたところの）を、彼等に最も特有の事業として歸する。ところが彼等は、それについて何等かの事を他の者共よりもはやく知り、それに從つて彼等の打算をなしただけのことなので

ある。かくのごとく彼等もまた天候製作者を以て目されてゐる。そして此信仰は彼等の權力の悔りがたき道具なのである。

四五〇

政府に關する新舊の概念。――政府と人民とを差別するのは、丁度一のより强くより高きと、一のより弱くより低きと、この別な權力範圍が協商して結合するに至つたかのごとく、政府と人民とを差別するのは、遺傳されたる政治的感情の殘物であつて、大抵の國家に於ける權力情態の歴史的確立に、今尙ほぴたりと適應してゐるのである。例へば、ビスマルクが立憲制度を政府と人間との間なる妥協として記するとき、彼は歴史に根據を有するところの一の原理に從つて語つてゐるのである(その歴史から、愚劣の附屬物――それなしには人間的な何物も存在し得ないやうな――をもひき出すのは勿論である)。一方では今我々は――純粹に頭から出て來たところの、そしてこれから歴史を作らねばならぬところの一の原理に從つて――政府が人民の器官のほかの何物でもないこと、謙讓に慣れたる『下』との關係に於て、思慮深き、尊敬すべき『上』でないことを知らなければならぬ。我々がこの、より論理的であるとは云へ、今日まで非歴史的な、心のままな、政府と云ふ概念を承認する前に、我々はその結果のどんなものであるかをも考へて見たい。なぜと云つて、人民と政府との關係は最も有力な模範的關係で、それに從つて知らず知らず、教師と生徒との、主人と家僕との、家長と家族との、大將と兵卒との、師匠と弟子との關係などが形作られるのである。現在のところすべてのかうした關係は、流行の立憲的政體の影響の下に、聊か變化して來てゐる。それは妥協になりつつあるのである。しかしながら、あの最新なる概念が普く人々の頭を支配するやうになつたとき、如何に向け變へられたり押し動かされたり、名義と實質とを變へたりせねばならないか？　しかし、それにはまだ一世紀の上を要するかも知れない。この點に於ては、愼重と徐々の發展とのほかに、より多く願望さるべき何物もないのである。

四五一

黨派の囮につかはれる正義。――思ふに、支配階級の高貴なる(必ずしもあまり聰明でないまでも)代表者等は誓言していふかも知れない、『我々は人間を同等に取扱ひ、彼等に同一の權利を承認しようと思ふ』と。この限りに於て、正義を基礎とする社會主義的な考へかたは可能である。しかしながら前に言つたごとく、ただ、此場合犧牲と禁欲とを以て正義を實習するところの支配階級の内にのみ可

能なのである。これに反して從屬階級の社會主義者等がなすごとく、權利の同一を要求するのは、所謂正義の所產でなくして義望の所產である。汝等が血の垂れる肉片を猛獸の前にのぞけ、再びそれを引つ込めて、遂にその猛獸が咆哮するに至つたとき、汝等は、この咆哮が正義を意味すると思ふか？

四五二

所有と正義と。——社會主義者等は、今日の社會に於ける財產の分配が數知れぬ不正と橫暴との結果であることを指摘し、そして要するに、左樣に不正の根據をもつたものにまでの義務を拒斥するとき、ただ個々のものをのみ見てゐる。古代文明の過去全體が、暴力や、奴役や、欺瞞や、過誤なぞの上に築かれてゐる。しかしながら我々は我々自らに此等のすべての情態の遺產を、否あらゆる過去の合成物を廢棄することが出來ない。またそれの一斷片の回收を要求するの權利をもつてゐない。不正の心情は非所有者の魂にもひそんでゐる。彼等は所有者よりより善くない。そして何等の道德上長所をもつてゐない。なぜと云つて、いつかは彼等の祖先が所有者であつたのだから。强制的の新しき分配でなく、むしろ徐々になされる意見の變改が必要である。正義はあらゆる事物に於てより大きくならねばならぬ。橫暴の本能はより弱くならねばならぬ。

四五三

欲情の舵手。——政治家は公的の欲情を刺戟する——それによつて呼びさまされたる反對の欲情を利用する爲めに。例へば、ある獨逸の政治家はよく知つてゐる——加特力の教會が決して露西亞と同じ計畫をもたないであらうことを、否むしろ、露西亞と同盟するよりも土耳古と同盟するであらうことを。また彼は知つてゐる——獨逸が佛露の同盟から大なる危險を以て脅かされてゐることを。されば彼がもし、佛蘭西を加特力教會の根域にすることに成功するならば、この危險を長く除き去つたのである。そこで彼は加特力に對する憎惡を表示することに、またあらゆる種類の敵對によつて、法皇の權威の承認者を熱烈なる政治的權力——獨逸の政策に敵であり、そして、自ら獨逸の反對者として の佛蘭西と融和せねばならぬところの——に變へることに興味をもつた。彼の目的は佛蘭西の加特力化である——丁度ミラボオが非加特力化の中にその祖國の救ひを見ただけそれ丈け必然に。乃ち、ある國家はある他の國家の幾百萬の頭を暗くしようとする——それによつて彼の到益を引き出すことの爲め。隣國の共和政體を、メリメエの言ふごとく le désordre organisé（譯者註——組織されたる不秩序）を支持する——この政體が人民をより弱くし、よりばらばらにし、戰爭に對してより不適當にす

ると云ふ丈けの理由から――のもこれと同じ考なのである。

四五四

危險なる革命的精神。――社會のある革命を志してゐる人々は、自分自身の爲めに何物かを獲得しようと思ふものと、その子孫の爲めに何物かを獲得しようと思ふものとの二に分たれる。後者はより危險である。なぜと云つて彼等は無私慾と云ふ信念と良心とをもつてゐるから。他の革命者等は範絡することが出來る。それをなすべく、支配者の社會はつねに十分に富んで居り、且つ悧巧である。目的が非人格的になるや否や危險ははじまる。非個人的興味からの革命者等は、すべての現狀の防護者等を、個人的に興味をもつてゐるものと見做す。そして自らをその敵よりすぐれたものとして感ずるのである。

四五五

父權の政治上價値。――人が一人の息子をも有しないとき、彼はある特定の國家の要求に喙を容れるべき十分の權利を有しないのである。人は彼自ら他の人々と共に彼の最も親愛なる目的を立てねばならなかつた。ただそれだけが彼を國家にまで緊縛する。彼は彼の子孫の幸福を眼中に置かなければならぬ。從つてとくに、すべての制度及びその變更に對し、正當にして自然なる分前をとるべく子孫をもたなければならぬ。より高き道德の發展は、人が息子を有すると云ふことの上に繫つてゐる。それは彼の心持を非利己的にする。或はより正しく云へば、それは彼の利己主義を期間の上で擴大する。そして彼の個人的生涯のむかうに横るところの目的を、眞面目に追求させるのである。

四五六

系圖自慢。――善き系圖の、父に至るまで、連綿として續いてゐるのを誇りにするのは、正しいことであるかも知れない。しかしながら、續いてゐると云ふ丈けを誇りにするのは別である。なぜといつて、續いてゐるだけならば、誰にもであることだから。善き祖先からの出は、純粹の世襲貴族を作り上げる。その聯鎖の間なるただ一の中斷は、一の惡しき先祖は乃ち、世襲貴族を駄目にしてしまふ。自分の貴族なることを口にする各の者に對しては、人はすべからく問ひ尋ねなければならぬ、『汝は汝の先祖等の間に一人の横暴な、貪慾な、放逸な、邪惡な、殘忍な人間をもつてゐないか？』と。彼にしてそれに對し、善き意識と本心とを以て否と答へ得るならば、則ち人をして彼との交りを求めしめよ。

四五七

奴隷と勞働者。――我々があらゆるほかの幸福（あらゆる種類の安全だとか、避難所だとか、滿足だとか云ふやうな）によりも、虛榮心の滿足により多くの價値を置くと云ふことは、各人（政治上の理由をはなれて）が奴隷の廢止をねがひ、人間をこの地位に置くのを最も嫌忌すると云ふことによつて、滑稽な程度にまで示される。けだし各人は自らに言はなければならぬ――奴隷があらゆる關係に於て近代の勞働者よりも、より安全に且つより幸福に生活してゐると云ふこと、また、奴隷の勞働が『勞働者』の勞働に比べれば甚だらくなものであると云ふことを。我々は『人間の威嚴』の名に於て抗論する。しかしながら、卒直に表白すれば、それは不平等を、世間から低く評價されることを、最も辛い運命と感ずるところのあの氣に入りの虛榮心なのである。キニイクの思想家はそれについて異つた考へかたをする。なぜならば彼は名譽を輕蔑するのだから。かくてディオゲネスは一時奴隷兼家庭教師であつた。

四五八

指導的精神とその道具。――我々は見る、大なる政治家や、また一般に、多くの人々を自分の計畫の遂行にまで用ひねばならぬ人々は、ときとしては甲のやりかたをし、ときとしては乙のやりかたをする。彼等はその計畫に適した者共を、甚だ上手に且つ注意深く想ひ出し、比較的に大なる自由をその者共にゆるす。なぜならば、此等の撰び出され者共の性質が、彼等自らの行かせたいと思ふ所へ、うまくその者共を驅り立てるべきことを知つてゐるからである。或は、彼等はうまく撰び出さない。否、彼等の手にはいる何物をでもつままへる。しかしながら各の粘土からして彼等の目的に役立つ何物かを作り出す。この後の種類はより横暴である。彼等もまたより從順な道具を欲求する。彼等の人間に對する智識は通例ずつとより少く人間に對する侮蔑はより大きい――第一に擧げた階級の場合に於てよりも。しかしながら彼等の構造したる器械は一般に、前者の工場からの器械よりもよく働くのである。

四五九

勝手な法律が必要。――法律家等は、最も完全に考へ出された法律がある國民の中に行はるべきか、或は最もたやすく理解される法律が行はるべきかについて論爭する。前者――その最も善き典型は羅

馬法である――は素人に理解しがたく思はれる。そしてそれ故に彼の法律に對する感じの表白のやうに思はれない。民衆法は、例へば日耳曼法は粗野で、迷信的で、非論理的で、部分的には愚劣であつた。しかしながらそれらのものは全く截然たる、遺傳的の、國民的の風俗や感情に相應してゐた。し、かしながら我々の場合に於けるごとく、法律がもはや習慣でないところでは、それはただ命令され得るだけである、强制であり得るだけである。我々一同はもはや法律に對する何等の習慣的な感情をもたない。それ故に我々は勝手な法律――そこに法律があらねばならぬと云ふ必要の表示である――で以て甘んじなければならぬ。そのとき最も論理的なものはとにかく最も採用すべきものである。なぜならば、それが最も公平無私なものであるから――各の場合犯罪と刑罰との關係に於ける最小の單位が勝手に決定されるにしたところで。

四六〇

民衆の偉大なる人物。――民衆が偉大なる人物と呼ぶところのものに對する處方はたやすく與へられる。あらゆる事情の下に、人は彼等民衆に甚だ愉快なる何物かを供給せよ。或は何々が甚だ愉快であらうと云ふことを彼等の頭に入れ、それからそれを彼等に與へよ。しかし、どんな事があつても直ぐに與へるな。むしろ大なる努力をもつて戰ひ獲よ。或は戰ひ獲るやうに見えしめよ。民衆は、一の强大な、制御しがたき意志の力がそこに働いてゐると云ふ印象をもたなければならぬ。少くともそれがそこにあるやうに見えなければならぬ。各の人は猛烈な意志を嘆賞する。なぜならば何人もそれを有しないからである。そして各の人は、彼がそれをもつてゐるならば、彼と彼の利己主義とにとつてもはや何等の制限もないと云ふことを、自らに言ふのである。今もしも、かくのごとき强烈な意志が甚だ愉快なものを產出する――彼の熱望に聽從することの代りに――と云ふことが明らかになるならば、人々は今一度嘆賞する。そして自分自身に幸福を願望する。その上、もし彼が民衆のあらゆる性質を有してゐるならば、いよいよ彼等が彼の前に耻づることは少い。そして彼はいよいよ民望をあつめる。乃ち、彼は横暴でも、嫉妬深くでも、貪慾でも、陰險でも、阿諛的でも、卑屈でも、高慢でも、否場合によつてはいかなるものでもあり得るのである。

四六一

君主と神と。――人々は屢々彼等の神と交際するごとく、同じしかたに於て彼等の君主と交際する――けに、屢々また君主が神の代理者であり、少くとも神の祭司長であつたので。尊敬や、憂懼や、

羞耻や、この殆んど氣味わるき心持は、ずつとより弱くなつた、そしてなつてゐる。しかしながら折折それはまた燃え上り、一般に力強き人物の上に拘着する。天才の禮拜は神と君主とのかうした崇敬の名殘である。ある特定の人間を超人にまで持ち上げるべく努力されるところには、どこにでも、民衆の諸層全體をそれが實際にあるよりも、より生硬にしてより賤劣な者と見做すべき傾向もあるのである。

四六二

私の理想鄕。——より善く整頓されたる一の社會に於ては、人生の厄介な勞働と困厄とは、これによつて最も少く苦む者共にまで、すなはち最も愚鈍な者共にまで割り宛てらるべきであらう。そして一歩一歩、上へあげて行く——遂には苦みの最も高い、最も崇高な種類に對して最も敏感であり、それ故に、人生の最も大なる輕減を以てして尙ほ且つ苦むところの人々にまで。

四六三

顚覆の說に於ける狂妄。——ある政治的の竝びに社會的の夢想家等は、熱心に且つ雄辯にあらゆる秩序の顚覆を要求する——さうなれば直に美しき人間性の最も立派な殿堂が謂はば自らにして出來上るであらうと云ふ信仰から。此等の危險なる夢想の中には、人間性情の奇蹟のやうな、原始的の、しかしながら謂はば埋沒されたる善良を信ずるところの、そしてその埋沒のあらゆる責任を、社會や、國家や、教育に於ける、文明の諸の制度に歸するところの、ルッソオの迷信がやはりまだ名殘りをとどめてゐる。殘念ながら我々は歷史的經驗から知つてゐる——かくのごとき各の顚覆が、最も暴烈なエネルギイを、最も遠き時代の久しく埋沒されたる恐怖や放逸として、新に蘇生させると云ふことを。されば一の顚覆は、衰弱したる人間性に於ける力の源泉にはなるかも知れない、しかしながら決して、人間性情の整頓者に、建築師に、藝術家に、完成者にはなり得ないと云ふことを。それは整頓や、淨化や、改造に傾いてゐた節度あるヴォオルテエルの性情でなくして、むしろルッソオの熱情的な痴愚と半うそとである——あの樂觀的な革命の精神を呼び覺したのは。あの精神に對しては、私は Ecrasez l'infâme!"(惡黨共をぶつつぶせ!)と叫ぶ。あの精神によつて開化の、竝びに進步的發展の精神は久しい間遂ひ拂はれてゐた。我々をして見せしめよ——我々の各は個人的に——あれを再び呼び返すことが可能であるかどうかを!

四六四

中庸。――思考及び攻究に於ける完全なる截然性は、乃ち精神の自由が、性格の特徴になつたとき、それは行爲の中庸を生じで來る。なぜと云つて、それは熱望を弱め、精神上目的の促進にまで、現前のエネルギイの多くを引きつけ、そしてあらゆる急激な變化のあまり役に立たぬことを、或は無用にして危險なことを示すからである。

四六五

精神の復活。――ある國民は通例政治的病床の上にその若々しさをとり返す。そして、それが權力の追求と主張とに於て次第次第になくして來たところの彼の精神を、再びそのところに發見する。文明は最も先づ、政治的に弱められたる時代に負ふところが多いものである。

四六六

舊い家の中なる新しい意見。――意見の顚覆は直ぐさま制度の顚覆によつてつづかれない。むしろ、新しい意見は久しい間、その先行者の荒れはてた、氣味惡くなつた家の中に住んでゐる。そして住居のないことからしてさへもそれを保守する。

四六七

教育事項。――大きな國家に於てける教育事項は、いつも甚だ平凡なものであらう――大きな臺所に於て、料理がたかだか平凡になされるに過ぎないと同じ理由から。

四六八

邪念なき腐敗。――公衆の批評の鋭い風が吹き込まないやうなすべての制度には、邪念なき腐敗が菌のごとく成長する(乃ち例へば、學者仲間だとか元老院などに於て)。

四六九

政治家としての學者。――政治家になる學者には、通例喜劇的な役が割りあてられる。彼等はある政策の良心であらねばならぬ。

四七〇

羊の背にかくされたる狼。――殆んど各の政治家はある事情のもとに、彼が飢ゑたる狼のごとく、羊の群へはいり込むことほど、正直な人間を左樣に必要に感ずる。しかしながら奪つた牡羊を食ふ爲めにでなく、むしろ彼の毛深き脊のうしろに身をかくす爲めである。

四七一

幸福な時代。――幸福な時代はもはや全く可能でない。なぜならば人々がそれをただ希求しようと思ふだけで、手に入れようと思はないからである。そして各個人は、彼によき日の來るとき、切に不安と悲慘とを乞ひ求めることを學ぶからである。人間の運命は幸福な瞬間の上に立てられてゐる――各の生活がそれらの瞬間をもつてゐる――しかしながら幸福な時代の上に立てられてゐない。これにもかかはらず此等の時代は、人間の想像に於ける『山のむかう』として、前時代の遺產として存在しつづけるであらう。なぜと云つて、幸福な時代と云ふ觀念は、ずつと夙くから今日に至るまで、恐らくあの情態――その中に人は、狩獵と戰爭との猛烈な奮鬪のあと、自らを休息へ委ね、彼の手足をのべ、眠の翼が周圍をはばたくのを聞く――から抽き出されてゐた。人があのふるい習慣に從つて、困厄と辛酸の期間全體のあと、彼がまた相應したる增進と持續とに於けるあの幸福の情態を享樂し得るやうに想像するとき、それは間違つた結論である。

四七二

宗教と政府と。――國家或は、より明白に、政府がそれ自らを、未丁年者の一群にまでの、指定された る後見人と見做し、そして彼等のために、宗教の保存すべきものであるか、廢棄すべきものであるかの問題を考量する限り、それがいつも宗教の保存に對して決定すべきは、極めてありさうな事である。なぜと云つて宗教は個人の心意を滿足させる――損失や、缺乏や、恐怖や、不信の時に於て、それ故、政府が私人の精神的苦惱の輕減にまで、直接何等かの事をなすべく、自ら無力と感じたる場合に於て。けに一般的のさけがたく免れがたき災厄(飢饉だとか、經濟上の恐慌だとか、戰爭だとか云ふやうな)に於てさへも、宗教は群衆にまでやすらかな、心置きなき期待の態度を與へる。いつでも政府の必然的な、或は偶然的な缺點が、もしくは王統的興味の危險なる結果が、聰明な者の目にとまり、彼に反抗の心をもたせる場合には、非聰明な者共は神の指を見るやうに思ふであらう。そして、忍耐して上からの管理(その概念に於て、政府の神的竝びに人間的方法が通例融合する)に服從するであらう。かくして內的の內國的平和と發展の永續性とが保存される。民衆感情の統一の中に、すべての者に對す

る同じ意見及び目的の中に横るところの權力は、宗教によつて保護せられ確定せられる――僧侶等が國家と折合はないで葛藤を生ずるやうな稀な場合を除いては。通例國家は僧侶等を手に入れることを知るであらう。なぜならば、國家は彼等の内密な魂の教育を要するから、また外觀上全く異つた興味を代表するところの臣僕を評價することを知つてゐるからである。今日でも僧侶等の助力なしには如何なる權力も『正當』になり得ない――ナポレオンの理解したごとく。かくのごとく絶對的後見人的政府と、宗教の周到なる保存とは、必然に相提携して行く。これと共に承認されねばならぬ、支配するところの人物と階級とが、宗教から彼等に與へるところの便益について啓發され、從つてある程度まで宗教に立ちまさつて自らを感ずる(彼等がそれを手段として用ふる限り)と云ふことは。かくのごとく此處に自由精神はその起源を有してゐる。しかしながら、民主的國家に於て教へられるやうな、あの全く別な政府觀念の解釋が行はれはじめるとき、それはどんなものであらうか？　その中に民衆意志の器械よりほかの何物も見られないとき、『下』とのコントラストをなしたる何等の『上』もなく、むしろ專ら唯一の主權者の、卽ち人民の一職能のみがあるとき、それはどんなものであらう？　ここにもまた、人民が宗教に對して取るところの態度と同じ態度が、政府から取られるばかりである。開明の各の流布はその代表者の中にすら反響を見出さねばならないであらう。そして國家の目的に對する宗教的衝動力及び慰藉の利用や解釋は、左樣に容易でないだらう(有力なる黨派の主領等が折々、開明の專制政治に似たやうな勢力を用ひるにあらざれば)。しかしながら國家が宗教からその上の如何なる利便を引き出すことをも許されないとき、或は人民が宗教に關して一貫した、統一した處置をとることを政府に許すべく、宗教的事項に關してあまりに多樣に考へるとき、必然にそれからの活路が、卽ち宗教を私事として取扱ひ、各個人の良心と習慣とに委ねてしまふと云ふ方法が見出されて來る。かうした事の第一の結果は、宗教的感情が始められるやうに見えると云ふことである――國家が知らず知らず、或は故意に息をつまらしてゐたところのもの、壓し隱されてゐた衝動が今顯れて來て、極端にまで奔逸する限りに於て。しかしあとでは、宗教を埋沒するほどに諸宗派が繁り昌へたこと、宗教が私事になるや否や、夥しき龍の齒が播かれたことは明らかにされる。爭鬪の光景や、宗教的告白のあらゆる弱さの敵意ある暴露は、遂に何等の方策をも許さない――各のより善き、より天分ある人間が無宗教をその私事にすると云ふことを除いては。さてその感情は今や支配者等の精神に於ても優勢になつて來る。そして殆んど彼等の意志に反しても、彼等の方策に反宗教的の性格を與へる。かうなつて來るや否や、從前國家を半ば神聖な、或は全く神聖なある物として禮拜してゐたところの、尙ほ宗教的な心持をもつた人々は、國家に對して明らかに敵意を有することになつて來た。彼等は政府の

方策のすきまをねらひ、彼等の能ふかぎり阻止し妨害し攪亂しようと試みる。そして反對の非宗教的な黨派を、彼等の撞着の興奮によつて、國家に對する一の殆んど狂信的な熱誠にまで追ひ込んでしまふ。それと關係してそこにはまた默々として働きを共にしてゐるものがある。卽ち宗教から分離したのち、此等のサアクルの中なる人々の心情は一の空隙を意識してゐる。そして國家へ歸依することによつて取りあへず一の補充を、一種の塡充を獲たいと思ふ。これらの恐らくは久しく續くところの過渡的鬪爭のあと、宗教的黨派が尙ほ、一の舊情態を囘復しその車をかへすべく十分に强いか——その場合どうしても開明の專制政治が（恐らくは從前よりもより少く開明で、そしてより多く小心翼々であらう）、國家をその手に入れてしまふ——それとも、非宗教的黨派がその目的を遂げ、彼等の敵手の繁殖を數時代の間、學校や教育などによつてでも阻害して置き、遂に不可能にしてしまふかは決定される。しかしながらそのときは、國家に對する彼等の狂熱も減退する。國家を一の神祕のごとく、一の超自然的な制度のごとく見做すところのあの宗教的崇敬と共に、國家に對する畏敬的な信心ぶかき關係がまた動搖させられたことは、いよいよ明らかになつて來る。爾來個人等はつねにただ、國家が彼等に有利にもしくは有害になり得る方面をのみ見る。そしてあらゆる方法を以て國家の上に勢力を獲得しようと努力する。しかしながら此競爭はやがてあまりに大きくなる。人々や諸黨派はあまりに速く變化する。そして彼等が辛うじて登りきつたや否や、再び山からあまりに荒く投げ落しつこをするのである。かくのごとき政府に遂行されるすべての方策には、その持續の保證が缺けてゐる。そのとき人々は、熟した果實をみのらすべく、數十年數百年の默々たる成長を要するやうな企圖を逃避する。何人も、法律を持ち來した權力に一時屈從すると云ふより以上に、法律に對する何等の義務をも感じない。しかしながら人々は直に、一の新しい力によつて、一の新しく形成するところの多數者によつて、それを掘り返すことにとりかかる。遂に——確信を以て斷言されてもよい——あらゆる政府に對する不信は、此等の短命な戰の無駄骨折に對する洞察は、人々を全く新しい決斷にまで押しやらねばならぬ。卽ち國家と云ふ概念の廢棄にまで、『公私』と云ふ對照の廢止にまで押しやらねばならぬ。私の結社はだんだんと國家の仕事を吸收する。政府のふるい事業からとり殘されたる最も粘り强い遺物すらも（例へば私人を私人から保護すべき筈のあの仕事など）、遂にはいづれ私の企業によつて處理されるであらう。國家の輕蔑、國家の衰亡、國家の死滅は、私人（私は用心して個人と云はない）の解放は、民主的國家觀念の結果である。ここにその使命がある。その民主的國家觀念が使命——すべての人間的な事物と同樣、多くの理性と反理性とを包有してゐるところの——を果したとき、そしてふるい病氣のぶり返しが打ち克たれたとき、人間性の物語の新しい頁が開かれ、その上に人々はさまざまな希らしい話

を、また恐らくは若干の善をも讀むであらう。以上述べ來つたところのものを今一度總括して云へば、後見人的政府の興味と宗教の興味とは、互に手を取り合つて行くもの故、後者が亡びはじめれば、國家の基礎もまた搖がされる。政治的事物の神聖な秩序に對する、國家の存在に於ける神祕に對する信仰は、宗教的の起源をもつてゐる。宗教が消え失せるならば、國家も必然にそのふるいイシスのヴェルをなくしてしまふ。そしてもはや何等の畏敬の心をも起させない。人民の主權は、精しく見れば、此等の感情の範圍に於ける最終の魅力や迷信を逐ひ拂ふことにも役立つ。近世の民主主義は國家滅亡の歷史的形式である。この確實な滅亡から來るところの見込みは、如何なる關係に於ても不幸なものでない。人々の賢さと利己とはすべての彼等の性質の中最も進歩したものである。國家がもはや此等の衝動の要求に應じない場合、渾沌は決して出て來ないであらう。むしろ、國家よりもずつと氣のきいた物が、國家を統御することになるであらう。如何に多くの組織的勢力が既に死んで行くのを人類は見たことぞ！　例へば、數千年の間、家族の力よりもずつと強大であつたところの氏族の力は、前者が存在したずつと前に、既に支配し統制してゐた。我々自らも、かつて羅馬主義の及ぶ限り主權をもつてゐたところの、家族の權利及び權力と云ふ重要な觀念の、だんだんと影が薄くなつて來るのを見る。かくのごとくのちの時代はまた、國家が地球のある一定の部分に於て無意義になつて來るのを見るであらう。——現在に於ける多くの人々が、殆んど恐怖と嫌惡となしには考へ得ないところの觀念である。此考を宣傳し實現する爲めに働くのは、勿論別の事である。人は、あとですき碎かれたる土の上に播かるべき種子を、誰もまだ示さないでゐるのに、今日既に鋤に手をかけるべく、彼の理性を甚だ己惚強く考へてゐなければならぬ、また歷史の生嚙りをのみしてゐなければならぬ。されば我々をして『人間の賢さと利己と』に信賴せしめよ——國家が尙ほ少時の間存續することの爲めに、またあまりに興奮した性急な生學者の破壞的企圖の斥けられることの爲めに！

四七三

社會主義とその手段。——社會主義は殆んど老いぼれたる專制主義——それを彼が相續しようとしてゐる——の空想ずきな弟である。されば彼の努力は最も深い意味に於て反動的である。なぜと云つて彼は、ただかの專制主義が有つてゐただけの、國家的權力の分量を欲望する。否、彼はあらゆる過去に凌駕する——彼が個人性の完全なる滅却を志すことによつて。その個人性は彼にまで自然の不當なる贅澤と見える。そして彼によつて合目的な一般社會の器官にまで改善されなければならぬ。その類緣の故に彼はあらゆる權力の過度の開展に近く見える——シチリアの專制者の宮廷に於けるふるい

典型的な社會主義者プラトオのごとく。社會主義は此世紀のシィザァ的專制政治を願望する（そしてある事情の下にはそれを促進する）。なぜならば彼は、前に云つた通り、その相續者にならうと思ふのだから。しかしながら此相續物すらも彼の目的にとつて十分であるまい。彼はかつてそれに似たる何物もなかつたやうな絶對的國家の前に、あらゆる市民の最も從順に歸服すべきことを要求する。そして彼はもはや國家に對するふるい宗教的な信心なぞをあてにしないで、むしろ知らず知らず常にその廢棄の爲めに働かねばならぬ以上――けだし、彼はあらゆる現存の國家の廢棄の爲めに働くのであるから――ただ一時の間だけ、最上の暴政によつて、折々存在を希望し得るにすぎない。されば社會主義はひそかに恐怖時代への準備をしてゐる。そして一知半解の群衆の頭へ『正義』と云ふ言葉を釘のごとく打ち込む――彼等からその理解をすつかり奪ひ取つてしまふべく（この理解が已にその半文化によつてかなりに傷けられたあとで）、また、彼等のやるべき惡しき遊戯に對して良心を與へるべく。社會主義は國家的權力のあらゆる集積の危險を、十分むごたらしく力强く敎へ込むことに役立つかも知れない。そしてその限りに於て、國家その物に對する不信を吹き込む上に役立つかも知れない。彼の荒々しい聲が『出來るだけ多くの國家を』といふ鬨聲（とときのこゑ）を擧げて攻めかかるとき、その叫びは先づ前よりもより騷々（さわ）しくなるであらう。しかしながら、間もなく反對の叫びもまた、いよいよ大なる力をもつて現れて來る――『出來るだけ少しの國家を』と云ふ叫びが。

四七四

國家に恐嚇されたる精神の發展。――希臘の Polis（譯者註――市、市から成立する國家）は、すべての統制的な政治的權力と同樣、文明の發達に對しては排斥不信の態度をとつてゐた。その力强き根本的衝動は、文明の發達の上に殆んどただ麻痺的阻止的な影響のみを及ぼした。それは如何なる歷史をも、如何なる生成をも文明の中にはいらせようとしなかつた。國法の中に規定されたる敎育は、すべての時代を束縛し、一の階段に拘禁して置かうとするものであつた。そののちプラトオもまた、彼の理想的國家に於てこれと異つたものを欲求しなかつた。かくのごとく文明は Polis に反對して發展して來た。勿論間接に、またその意志に反しては、Polis も手傳つた。なぜならば、その中の個人の功名心が非常に刺戟されて、彼等が一たび精神的發達の道を見出すと共に、それを最極端にまで追うて行つたからである。一方では、ペリクレスの讃辭なぞが持ち出されてはならぬ。なぜと云つて、それは Polis とアテンの文明との、外見上必然な聯絡についての、大なる樂觀的の夢想にすぎないのだから。夜がアテンの上に來る（疫病や傳說の壞滅や）すぐ前に、トゥキディデスは今一度アテンの文明を、あた

りを明るくする夕燒のごとく燃え立たせる――それに先立つた悪しき日の記憶をなくすべく。

四七五

歐羅巴の人間と國民性の滅却。――商業及び工業や、書物と書簡との交通や、あらゆるより高き文明の普遍性や、家屋と田園との急速なる變移や、あらゆる非地主の現今の遊牧生活や、此等の事情は國民性の、少くとも歐羅巴の國民性の弱化を、また遂に滅却を齎らさずにゐない。乃ち間斷なき交錯の結果として、彼等すべての間から一の混合種族が、歐羅巴人の種族が生じて來なければならぬ。今日のところでは國民的敵意の產出によつて、諸國民の分立が意識的にもしくは無意識的にこの標的に逆行してゐる。しかしながら、あの混淆の作用は、あの折々の逆流にもかかはらず、徐ろにその前進をつづけてゐる。その上、この人爲的な國民主義は、かつて人爲的加特力主義があつたごとくそれだけ危險である。なぜと云つて、それはその本質上、少數者から多數者の上に布かれた戒嚴令的情態であり、且つ自らの體面を維持すべく、詭計や、虛言や、暴力を要するからである。かうした國民主義にまで驅るのは、人々の言ふかも知れないやうに、多數者(人民)の利害關係なのでなく、むしろ何よりもまづある君主等の利害關係なのである。次ぎには、ある商業上社會上階級の利害關係なのである。我々にして一たびこれを認識したならば、我々はそれこそ何の怖るところもなく善き歐羅巴人として自らを處し、行爲によつて、國民の融合の爲めに働かなければならぬ。その努力に際しては、獨逸人は、諸國民の通譯者たり仲介者たるとの、その傳來の特性によつて貢獻することが出來る。序ながら猶太人等の問題全體は國民的國家の內にも存在してゐる――彼等の實行力とより高き聰明とが、彼等の長い苦惱の學校に於て時代から時代へ集積された理智的竝びに意志的の資本が、嫉妬と憎惡とを起させる程度に於て、ここに普く優勢にならねばならぬ限りに於て。乃ち、あの文學上の不行儀は、殆んどすべての今日の諸國民に流行してゐる――彼等が再び國民的にふるまふので、いよいよさうなのである――猶太人等をあり得べきすべての公的及び私的災厄の犧牲として、屠殺臺へ引つぱつて行くと云ふあの不行儀は。もはや諸國民の保存が問題でなく、むしろ、あり得べき最も强き歐羅巴の混合種族の產出が問題であるや否や、猶太人は他のどの國民的殘物にも劣らないだけそれだけ有用な望ましき一成分である。各の國民が、各の人間が、不快な、否危險な性質をもつてゐる。猶太人だけが例外をなすべきことを要求するのは殘酷である。加之、それらの性質は彼に於て、格段な程度にまで危險な恐ろしいものであるかも知れない。そして恐らく、一體に株式取引所の年若き猶太人は、人間屬の中の最も忌ましき發明品であらう。それにも係はらず總勘定に於て、私はある國民――我々一同の上に責任なし

にでなく、あらゆる國民の中の最もいたましき歴史を有したところの、また、世界に於ける最も高貴な人間(基督)や、最も純粋な賢人(スピノオザ)や、最も力強い書物や、最も有効な道德法を我々に與へたところの――にまで、如何に多くが寛恕されねばならぬかを知ることをよろこぶ。加之、中世の暗黑時代に於て、亞細亞の陰雲がものすごく歐羅巴の上に蔽ひかぶさつたとき、もつとも嚴しき個人的苦惱の下に、開明と精神的獨立との旗幟を押し立て、亞細亞に對して歐羅巴を擁護したものは、猶太人の自由思想家と、學者と、醫者とであつた。世界に對する一のより自然な、より合理的な、とにかく非神話的な解釋が、再び勝利を獲るに至つたのは、また、今日我々を希臘羅馬の古事物の開明と結びつける文明の連鎖が、引きちぎられないでしまつたのは、少からず彼等の努力に負うてゐる。もしも基督教が西洋を東洋化すべくあらゆる事をなしたならば、猶太人等は本當に、改めてそれを西洋化し返すべく貢獻したのである。そして、後者はある意味に於て、歐羅巴の使命と歴史とを、希臘のそれの繼續とすることに等しいのである。

四七六

中世の外觀上優越。――中世は教會に於て、一の全く世界的な、全人類を包括するところの目的をもつた、尚ほその上に、人類の最高の興味に關係する――と思はれてゐた――ところの目的をもつた制度を示してゐる。これに比較して見れば、近世の歴史が示すところの國家や國民の目的は、一の痛ましき印象を與へる。それらの目的は小さく、卑しく、物質的で、狹隘に見える。しかしながら我々の想像に及ぼすこの異れる印象は、固より我々の批判を決定しない。なぜと云つて、あの世界的な制度は見せかけの、虛構の上にきづかれたる要求――それがまだ存在しなかつた場合には、まづ產み出されねばならなかつたところの、救濟の要求のごとき――に應じてゐた。しかるに新しき制度は實際の厄難を除却する。そして、あらゆる人間の共通な、本當の要求に役立つべき、またかの空想的な原型を、加特力の教會を、蔭と忘却とへ投げやつてしまふべき制度の成立する時が來りつつあるのである。

四七七

無くて濟まされない戰爭。――人類が戰爭をすることをやめたとき、人類から尙ほ多くを(或は加之、)そのときはじめて多くを)期待するのは、空虛な狂信であり美しい靈魂主義である。さしあたり我々は他に何等の手段をも知らない――よつて以て衰弱したる國民が、あの陣中の荒き力を、あの深き非人格的な憎惡を、善き良心をもつたあの虐殺者の冷血を、仇敵の滅却に於けるある一般的な、規律

のある熱情を、大なる損失に對する、自己の生命及び友人のそれに對する、あの尊大な無頓着を、あの沈鬱な、地震のやうな魂の震撼を、各の大なる戰爭によつて爲されるだけ、それだけ強くたしかに分たれ得べき、他に何等の手段をも知らない。ここから出てくる小川や流――それは勿論あらゆる種類の石やがらくたなぞを持つて行つてしまひ、こまやかな文明の草原を滅ぼしてしまふ――によつて、精神の工場に於ける器械はそののち、都合よき事情の下に、新しき力を以て運轉される。文明は到底欲情や、惡德や、惡意やなしには濟まされない。帝國的になつた羅馬人が稍や戰爭をいやになつて來たとき、彼等は獸狩りや、試合や、基督敎徒の迫害なぞによつて新しい力を獲ようと試みた。全體に於て戰爭をもあきらめたらしく見える今日の英吉利人等は、それらの消え行く力を新しく產出するため、一の別な手段を採つてゐる。卽ちあの危險な探險旅行や、航海や、登山は、科學上の目的から企てられると稱せられてゐる。しかし實際は、あらゆる種類の冒險や危險からあまつた力を持ち歸る爲めである。かくのごとき尙ほさまざまな戰爭の代用物は發見されるであらう。しかしながら恐らくはそれによつて、愈々明らかに知られるであらう――今日の歐羅巴人の人間性のごとき、高く敎化された、それ故に必然的に弱くなつた人間性が、ただに戰爭を要すると云ふばかりでなく、また最も大なる、最も恐ろしき戰爭を、從つて野蠻への折々の退步をも要すると云ふことを――文明によつて、その文明とその存在とが失はれてしまはないことの爲め。

四七八

南方と北方とに於ける勤勉。――勤勉は二の全く異つた仕方に於て成立する。南方に於ける職人は營利衝動からでなく、むしろ他人の絕間なき需要から勤勉になる。蹄鐵を打ちつけて貰ひたいとか、馬車を修繕して貰ひたいとか云つて、人がいつも來る故、鍛冶屋は勤勉にやるのである。誰も來なければ彼は市場をぶらつき廻つてゐるであらう。自分の口に糊することは、富裕な土地では太して骨が折れない。それには彼は、ほんの少しばかりの仕事をすればよい。とにかく何等の勤勉を要しない。結局は乞食をして、そして滿足してゐるだらう。英吉利の勞働者の勤勉はこれに反して、營利心をその背後にもつてゐる。彼は彼自らと彼の目的とを意識してゐる。そして財物と共に權力を、權力と共に出來得る限りの大なる自由と個人的の地位とを欲求する。

四七九

高貴なる種族の起源としての富。――富は必然に種族の高貴を生ずる。なぜと云つて、それは最も

美しき婦人を撰ばせ、最も善き教師を傭はせる。それは人に清潔を、身體の運動にあつべき時間を、また特に愚劣にするところの肉體的勞働からの逃避を許し與へるのである。この限りに於て、富は二三代の中に、人をして上品に美しく運動せしめるべく、否行爲せしめるべく、あらゆる條件——情意のより大なる自由だとか、みじめに小さな事や、パンを與へる者に對する屈從や、しみつたれた事などをせずにすむとか——を供給する。二年若き人にとつて最もありがたい誕生日の贈物は、幸福のそれは、まさしく此等の消極的性質である。全く貧乏な人間は通例心持の氣高さによつて沒落する。彼は前進しない。そして何物をも獲得しない。彼の種族は生活の力を有つてゐない。しかしながらこれに關聯しては記臆されてゐなければならぬ——富は人が年に三百タアレルを、もしくは三萬タアレルを消費し得るとき、殆んど同一の効果を生ずると云ふことを。そのあともはや都合よき事情の何等の本質的な進級もないと云ふことを。しかしながら、それより少く所有するのは、子供として乞食をするのは、そして自らを卑しめるのは恐ろしいことである。その幸福を宮廷のきらびやかさの中に、强大な者や勢力ある者への從屬の中に求めるやうな人々にとつては、もしくは教會の頭にならうと思ふやうな人々にとつては、それが宜しきを得た出發點であるかも知れないけれど。(それは龍遇への間道にまで、こそこそとむぐり込むことを教へる)。

四八〇

方向を異にせる嫉妬と怠惰と。——社會主義のと國民的のと——或は、歐羅巴のちがつた土地でいろいろに呼ばれるごとく、何とでも呼ぶがいい——二つの相反したる黨派は、互に他を値してゐる。嫉妬と怠惰とは彼等二つのものに於ける原動力である。あちらの陣營では、人々が出來るだけ少く手を以て働かうとする。こちらの陣營では、人々が出來るだけ少く頭を以て働かうとする。後者に於て人々は、傑出したる、自ら伸びて行くところの個人を憎惡し嫉妬する。その個人は群衆的効果を目的として列伍に編入されることを欲しないのである。前者に於て人々は、より善き、外的に都合よきところへ置かれた社會的階級を憎惡し嫉妬する。その階級の固有なる使命は、文明の最高の福祉の產出は、人生を內的にいよいよ苦しく痛ましくするのである。固よりもしも、群衆的効果のあの精神を社會のより高き階級の精神にすることがうまく行つたならば、社會主義的群衆は、彼等が彼等自身とより高き階級との間に外的の平等をも求めるとき、全く當を得てゐるのである——なるほど彼等は內的には頭と胸とに於ては、既に互に平等になつてゐるのだから。より高き人間として生活せよ、そしてつねにより高き文明の行爲をなせ。さらば、生活するところのすべてのものが汝等の權利を承認する。

そして汝等が頭上に立つてゐるところの社會の秩序は、各の邪な目と攻撃とから安全に守られるであらう！

四八一

大なる政略とその損害。――ある國民が戰爭及び戰爭準備の齎らす最も大なる損害を、戰爭の費用や交易の阻止によつてでなく、また常備軍の支持によつてでなく――歐羅巴の八箇國が年々その爲めに二十億から三十億の金額を消費してゐる今日に於て、此等の損害が如何に大きなものであるにせよ――むしろ、年々その最も有爲なる最も力强き、最も働きのある人々が莫大なる數に於て、兵隊になるべく、彼等の本當の仕事や職業から引き離されると云ふことによつて受けるごとく、丁度そのやうに、大なる政略を行ひ、列强の間に決定的の發言權を獲ようとするところのある國民は、その最も大なる損害を、通例受けてゐると思はれてゐるところに受けない。全くのところ、此時以來始終それは、最も卓越したる才能者の一群を『祖國の神壇』に、或は國民的功名心の神壇にささげる――從前は今日この政略に飲盡される此等の才能者等に、ほかの活動範圍が開放されてゐたのに。しかしながら此等の公の犧牲からはなれて、また實際にずつとより恐ろしく、そこには絶えず千萬萬に於て同時に演ぜられるところの一の劇がある。政治上の榮冠を熱望したかくのごとき國民の、有爲なる、働きのある、理智のある、努力的な各の人間は、此熱望から支配され、もはや從前のごとく全然彼自らに屬してゐない。公共的福祉に對する日に日に新しき質疑と心配りとは、各の市民の理智的及び情意的資本が日々の貢を飲みつくしてしまふ。個人的の精力と勞働とに於けるすべてのかうした犧牲と損害との總量があまりに莫大なので、ある國民の政治的成長は、一の理智的貧弱と衰勞とを、また大なる集中と專念とのなければならない事業にまでの一の減退したる遂行力を、殆んど必然に引きよせる。終には斯う問ひ尋ねられてもしかたがない、曰く、『さらば全體のかうしたすべての花盛りと花やかさと（それはけにただ、新しき巨像に對する他の國民の恐怖として、國民的貿易及び商業に對する彼等の强制的寵倖としてのみ現れる）には利益があるか？――國民のこの粗惡な、けばけばしく光るところの花が、すべてのより高貴なる、より精緻なる、より精神的なる植物（その土地はこれまで、それらのものに隨分とんでゐた）を犧牲にせねばならぬとき。』

四八二

今一度繰返して言ふ。――公の輿論――私の怠惰。

第九部

自分と自身とのみゐる人間

四八三

眞實の敵。——確信は虚言よりも危險なる眞實の敵である。

四八四

顚倒したる世界。——我々は、ある思想家が我々に不愉快な議論をするとき、彼をよりきびしく批評する。しかし、彼の議論が我々に愉快なときさうすることは、より理性的であらう。

四八五

決然たる性格。——人は、彼がいつもその主義に從つてゐるためによりも、彼がいつもその氣質に從つてゐるために、ずつとより屢々、決然たる性格をもつてゐるやうに見える。

四八六

なくてならぬ一の物。——人は一の物を有しなければならぬ。うまれつき輕快な心持か、でなければ、藝術と智識とによつて輕快にされた心持かを。

四八七

事柄に對する熱情。——その熱情を事柄（科學だとか、國家の福祉だとか、文明だとか、藝術だとか云ふやうな）にむける人は、人間に對する彼の熱情から多くの火を取り去つてしまふ（彼等がその事柄の代表者である——政治家や、哲學者や、藝術家なぞが彼等の創造物の代表者であるごとく——場合に於てすらも）。

四八八

行爲に於ける平靜。——一の瀑布が落ち込むときに、より徐かによりゆつくりしたものになるごとく、偉大なる行爲の人物も、彼の行爲にさきだつ熱望が期待させるより、より多くの平靜を以て行動するのを常とする。

四八九

あまりに深くなく。——一の事柄をその奥底に於てつかまへる人々が、それに對して永久に忠實を失はないでゐることは希である。彼等はその底を明るみを出したのである。そこにはいつでも多くの善くないものが見えてゐなければならぬ。

四九〇

理想家の妄想。——すべての理想家は、彼等の奉仕するところの事柄が、本質的にほかのあらゆる事柄よりもまさつてゐると想像してゐる。そして、苟しくも彼等の事柄にして繁榮せねばならないものならば、それはすべてのほかの人間的企圖が要したと丁度同一の、惡臭を放つところの肥料を要することを信じようとしない。

四九一

自己觀察。——人間は自分自身に對し、自分自身のなす探索攻圍に對して、甚だよく防衛されてゐる。通例彼は、彼の外堡のほか彼自らについて何物をも知らない。本當の城壘は彼にとつて近づきがたく、加之、見ることさへも出來ない——友人と敵とが裏切者になり、彼を間道から連れ込むことをしないならば。

四九二

正當なる職業。——人々は、一の職業が實際にほかのすべての職業よりも重要であると信じない限り、或は自らに說得しない限り、滅多にその職業をつづけて行くことが出來ない。婦人のその愛人に於けるもこれと同樣である。

四九三

性質の高貴。——性質の高貴は大部分、お人善しと不信の缺乏とから成立してゐる。從つて拔目のない、成功しさうな人々が、優越感と輕蔑とを以て相手にしたがるやうな、丁度さう云ふところを包有してゐる。

四九四

標的と道と。——多くの人々は一たび選ばれた道に關して執拗である。その標的に關して執拗なも

のは少い。

四九五

個人的な生活方法に於ける獣はしさ。——すべての非常に個人的な生活方法は、それを採用してゐる人間に對して反感を起させる。人々は、彼が彼自らに與へてゐる、その異常なる取扱によつて、彼等自らを凡物にまでおとしめられたやうに感ずるのである。

四九六

偉大なるものの特權。——つまらない施與を以て力强き幸福を經驗させるのは、偉大なるものの特權である。

四九七

知らず知らず高貴に。——人は他の人々から何物をも求めないで、つねに彼等に與へることに慣れたとき、知らず知らず高貴に自らを處する。

四九八

英雄主義の條件。——ある人が英雄にならうとねがふときには、蛇が先づ龍になつてゐなければならぬ。でなければ彼には、彼に相當した敵が缺けてゐる。

四九九

友人。——苦みを共にするのでなく、樂みを共にすることが友人を作る。

五〇〇

干潮と滿潮との利用。——認識の目的に對して我々は、我々を一の事柄へ引き入れるところのあの內向的潮流と、また、しばらくののち我々をその事柄から押し出すところのあの潮流とを、利用することを知らなければならぬ。

五〇一

悦びその物。――『事物に對する悦び』と人々は云ふ。けれども實際に於ては、それは一の事物によるところの悦びその物である。

五〇二

謙讓な人間。――人間に對して謙讓な人間は、事柄（都市だとか、國家だとか、社會だとか、時代だとか、人類だとか云ふやうな）に對して一層より強く彼の僭越を示す。これが彼の復讐である。

五〇三

嫉妬と羨望と。――嫉妬と羨望とは人間の魂の陰部である。この比較は恐らくその上をつづけてなされるかも知れない。

五〇四

最も高貴なる僞善家。――全然自分自身について語らないのは、甚だ高貴なる僞善である。

五〇五

むしやくしや。――むしやくしやは一の肉體的疾病である。しかも、あとでその動因がとり除かれたと云ふことによつて、決していやされないところの疾病である。

五〇六

眞實の代表者。――眞實は、それを言ふのが危險である場合にでなく、むしろ張合のない場合に於て、最も少く代表者を見出すものである。

五〇七

敵よりも更に厄介な。――ある人々の同情的態度を我々は、あらゆる事情のもとにも信じてゐない。その癖と何等かの理由が（たとへば恩義などのごとき）、彼等に對する絶對的同情の體裁を維持すべく我々を餘儀なくする。かくのごとき人々は我々の敵よりも、ずつとより多く我々の想像を苦める。

五〇八

自由な自然。――我々は自由な自然へ出てゐることがまことにすきである。なぜならば、彼女は我々について何等の意見をも有しないから。

五〇九

各人皆一事に優越してゐる。――文明の交際に於ては、各人は少くとも一の事に於て、各の他の人に優越してゐるやうに感ずる。一般的の好意はこの上に基礎を置く――各人がある事情の下に助けを與へ得るものであり、それ故に、恥なくして助けを受け得るものである限りに於て。

五一〇

慰藉的論據。――人の死んだ場合、大抵の人々の用ふる慰藉的論據は、御同樣が左樣にたやすく慰藉されて感ずると云ふことを、辯解するために用ひられるだけ、それだけ苦痛の力を減殺するために用ゐられてゐない。

五一一

確信に忠誠なる人々。――非常に多忙な人は、自分の一般的見解や立脚地を殆んど不變のままで保持してゐる。一の觀念に奉仕して働いてゐる各の者も同樣である。彼は二度とも觀念その物を吟味して見ようとしない。彼はもはやそれをなすべく時を有しないのである。否、それを尙ほ議論を容れるものとして考へるなぞは、彼の利害關係に反してゐるのである。

五一二

道德と量と。――他の人の道德に比較して、ある人のより高き道德は、屢々ただ、その標的が量的により大きいと云ふ事實にのみ横つてゐる。前者は狹隘なる範圍の中にあつて、つまらない事との交渉に引きずり下されてゐる。

五一三

生活の收得物としての生活。――人間は彼の知識を以て常に左樣に遠く自らを伸張するかも知れな

い。自分自身にまで、左樣に客觀的に見えるかも知れない。しかしながら結局彼は、彼自らの傳記のほか、それから何物をも產出しない。

五一四

鐵のごとき必然性。——鐵のごとき必然性は、歷史の經過につれて、鐵のごとくもなく必然でもないことを見出されたところの物である。

五一五

經驗から。——一の事柄の非理性はそれの存在を否定する何等の論據でもなく、むしろそれの條件である。

五一六

眞實。——何人も今日では恐ろしい眞實の爲めに死なない。そこにはあまりに多くの解毒劑がある。

五一七

根本的洞察。——眞實の促進と人類の福祉との間には、何等の豫定された調和もない。

五一八

人間の運命。——深く考へるところの人は知つてゐる、彼がどんなに行動し判斷しようとも、つねに間違つてゐると云ふことを。

五一九

キルケとしての眞實。——誤謬は禽獸から人間を作つた。眞實は人間から禽獸を作ることが出來るか？

五二〇

我々の文明の危險。——我々の時代の文明は、その文明を用ふることによつて滅亡せんとするの危

險に臨んでゐる。

五二一

偉大とは方向を與ふるの謂なり。——如何なる流も本からして大きくも富んでもゐるものでない。むしろそれは、左樣に多くの支流を受け入れて、導き行くことによつてさうなるのである。すべての精神の偉大についても同じ事が云へる。誰かが、左樣に多くの支流の追ふべき方向を與へると云ふこと、ただそれだけが問題なのである。彼が最初から貧しく賦與されてゐたか、豐かに賦與されてゐたかは問題でない。

五二二

薄弱な良心。——人類に對するその意義の重要を口にするところの人々は、平凡な市井的な正直に關して、契約や約束の遂行に於て、薄弱な良心をもつてゐる。

五二三

愛されようと思ふ。——愛されようと思ふのは、僭越の最も大きいものである。

五二四

人間の輕蔑。——人間の輕蔑の最も明白なる徵證は、各の人をただ自分自身の目的に對する手段とのみ見做すこと、でなければ、全然取るに足らぬものと見做すことである。

五二五

矛盾から黨派を。——人々を自分自身に對する狂暴にまで驅つた人は、ある黨派をもその味方にした。

五二六

經驗を忘れる。——多くを考へる、しかも客觀的に考へるところの人は、たやすく彼自らの經驗を忘れる。しかしながら、それらの經驗によつて呼び出されたる思想を忘れない。

五二七

一の意見に執着する。——ある一人は一の意見に執着する。なぜならば彼が、自分でそこへ來たことに誇りをもてつゐる故に。他の者はそれに執着する。なぜならば彼が、骨折つてそれを學んだ故、またそれを理解したことを得意に感じてゐる故に。乃ち、双方ともに虚榮心からである。

五二八

光を避ける——善き行爲は惡しき行爲と同じだけぴくぴくもので光を避ける。後者は知られることによつて苦み(刑罰として)の來るのを恐れるのである。前者は知られることによつて悅び(卽ち、虚榮心の滿足が加へられるや否や、直ぐにやまつてしまふところの、あの純粹の悅びそのもの)の消えるのを恐れるのである。

五二九

日の長さ。——人がさし入れるべく多くの物を有するとき、一日は百のポケットをも有してゐる。

五三〇

專制の天才。——專制的な力を獲ようとする打ち克ちがたき欲求が魂の中に呼び起され、そして絶えずその火を持ちつづけるときは、貧弱な天分すらも(政治家や、藝術家などに於て)漸次一の殆んど抵抗しがたき自然力になつて來る。

五三一

敵の生命。——敵と戰ふことによつて生きる人は、その敵が生命を保存して行くことに興味をもつ。

五三二

より重要な。——說明されぬ、曖昧な事柄は、說明された明白なものよりも、より重要なものと見做される。

五三三

なされたる奉仕の評價。――誰かが我々になすところの奉仕を、我々は、その人がその上に置くところの價値に從つて評價し、それが我々に對して有するところの價値に從つて評價しない。

五三四

不幸。――不幸に關係したる榮譽（あだかも自らを幸福に感ずることが、魯鈍なこと、覇氣のないこと、通俗なことの徴證でてもあつたかのごとく）があまり大きいところから、誰かが、『しかし、如何に汝は幸福であるよ！』と言ふとき、我々は通例それに對して抗議を持ち出すほどである。

五三五

恐怖に於ける想像。――恐怖に於ける想像は、彼が最も重い物を荷はねばならぬとき、丁度そのとき彼の脊に跳び乘るといふ、あの意地悪い猿のおばけの役を演ずる。

五三六

乾燥無味な敵手の價値。――我々は折々ただ、ある事柄の敵手が乾燥無味なることをやめない故にのみ、その事柄に忠誠なるを失はないでゐる。

五三七

職業の價値。――一の職業は我々を考なしにする。――その内にその最も大なる福祉がある。なぜと云つて、職業は一の堡壘であつて、平凡な種類の疑惑や心配が我々を襲ふとき、我々はその背に引き退くことを許されるのである。

五三八

才分。――多くの人々の才分は實際にあるよりもより少く見える。なぜならば彼等はいつもあまりに大なる仕事にとり掛つたからである。

三九三

年少。――年少は不愉快である。なぜと云つて、その時代には如何なる意味に於ても、生産的であるといふことが可能でないから、或は理性的でないからである。

五四〇

あまりに大なる目的。——表向き大なる目的を立て、そののちひそかに、彼がそれを成し遂げるべくあまりに弱いことを覺るところの人は、通例また、その目的を表向き放棄するに十分な力をも有しない。そしてそれから避けがたく僞善者になる。

五四一

潮流に於て。——力强き水は、多くの石や藪をさらつて持つて行く。力强き精神は、多くの愚劣な、そして混亂した頭をさらつて持つて行く。

五四二

精神的解放の危險。——眞面目に企てられたるある人の精神的解放に於ては、彼の欲情や熱望もひそかにその利益を見出さうと希望する。

五四三

精神の肉體化。——人が多くの事を、そして賢く考へるときは、ただに彼の顏ばかりでなくその體まで、賢人の樣子をとつて來る。

五四四

惡しく見ると惡しく聞くと。——少く見るこころの人は、つねにより少く見る。惡しく聞くところの人は、つねにより多くの何物かを聞く。

五四五

虛榮に於ける自己享樂。——浮誇なる人間は自らを秀拔であると思ふほど、秀拔であることを欲しない。それ故彼は自己欺瞞の如何なる手段をも輕視しない。他人についての意見ではなくて、むしろ他人の意見についての彼の意見が彼の心に橫はるのである。

五四六

例外的に浮誇。——通例自足してゐる人間は、彼が肉體的に加減の悪いとき、例外的に浮誇になり、名聲と賞讃とに對して敏感になる。彼が彼自らを失へば失ふほど、いよいよ彼は他人の意見によつて、外側から、彼自らを取り返へさなければならないのである。

五四七

『才氣』——才氣を求める人は何等の才氣をも有しない。

五四八

黨派の首領等にまでの手語。——人が人々をして或る事柄にまで宣言をなさしめ得たとき、彼等は大抵の場合また、肉體にもそれを承認させられた。彼等はつまり一貫した人間と見做されたいのである。

五四九

輕蔑。——人は自分自身からの輕蔑に對してよりも、他人の輕蔑に對してより敏感である。

五五〇

感謝の紐。——ある奴隷的な魂は、彼等が感謝の紐でもつて縊り殺されてしまふほど、それほどまでに他人からの恩義を感ずる。

五五一

預言者の呼吸。——普通の人間のやりかたを前以て忖度する爲めには、先づ假定して置かれなければならぬ——彼等がある不愉快な地位から脱却する爲めに、つねに最小の精神的出費をなすものであるといふことを。

五五二

人間の唯一の權利。——習俗から横へ逸れる者は異常なものの犧牲である。習俗にとどまる者はそれの奴隷である。どちらの場合に於ても人間は破滅へ行く。

五五三

禽獸の下。——人間が腹をかかへて高笑ひをするとき、彼はその俗惡によつてすべての禽獸を凌駕する。

五五四

一知半解。——ある外國語を不完全に話す者は、それをうまく話す者よりも、その内により多くの享樂をもつてゐる。享樂は一知半解に伴ふものである。

五五五

危險なる世話好き。——ある人々は人間の生活をより苦しくしようとねがふ——あとでその生活を樂にすることの處方を與へる爲め、たとへば、彼等の基督教などを與へる爲めのほか何等の理由もなしに。

五五六

勤勉と誠意——。勤勉と誠意とはややもすれば相背く。勤勉は果實を未熟のままに引きちぎらうとする。けれども誠意は、それがつひに樹から落ちて潰けてしまふまで、あまりに久しく殘して置かうとするからである。

五五七

疑ひをかける。——我々は我々の我慢しきれない人間に、疑ひをかけようとつとめる。

五五八

條件を缺ぐ。——多くの人々は、彼自らの方法に於て善良であるべき機會を、その一生に亘つて待つてゐる。

五五九

友人の缺乏。——友人の缺乏は、その人間が嫉妬深いか、もしくは驕慢であることを推定させる。多くの人々がその友人を持つてゐるのは、彼が嫉妬心を起すべき何等の動機をもたないと云ふ、その幸福な事情のお蔭にほかならない。

五六〇

多方面に於ける危險。——一だけ餘計に才能を有するのは、一だけ少く才能を有するよりも、屢々その立場をより不安なるものにする。——丁度テエブルが四脚に於てよりも、三脚に於てより善く立つごとく。

五六一

他人の模範。——善き實例を與へようと思ふ者は、彼の德に一粒の愚劣を加へなければならぬ。そのとき人々は模倣する。そして同時に、模倣された者の上に彼等自らをもちあげる——彼等の好んでなすところのものである。

五六二

標的たること。——他の人々が我々について云ふところの惡い事は、屢々、本當に我々に當つてゐない。むしろ、まるで異つた原因からの、癇癪や不機嫌の表示である。

五六三

たやすくあきらめられる。——我々は、もしも過去を醜くすることに我々の想像を用ひたならば、あきらめたる願望のためにあまり苦まないですむであらう。

五六四

危險に臨んで。——人は、彼がやつと馬車から出たばかりのとき、轢き殺されんとすることの最も大なる危險に臨んでゐる。

五六五

聲によつて定められる役割。——平生やつてゐるよりも、より聲高く話すべく餘儀なくされる（半ばは聾の前で、或は大なる聽衆の前なぞで）人は、一般にまづ、彼の告知すべき事物を誇張する。多くの人々は謀反人になつたり、意地悪き誹謗者になつたり、陰謀を企てる者になつたりする——ただ、彼の聲が私語に最も適してゐると云ふだけの事から。

六六

愛と憎しみ。——愛と憎しみとは盲目でない。けれども、彼等自らの運ぶところの火によつて眩惑されるのである。

五六七

都合よく迫害されること。——自分達の功績を世界にまで全く明らかになし得ない人々は、彼等自らに對する力强き敵意を呼び起さうとつとめる。彼等はそのとき、彼等の功績とその承認との間にこの敵意の立つてゐることを考へるべく、また、他の多くの者共も同じやうに思つてくれる（それは彼等の承認にとつて甚だ不利である）ことを考へるべく慰藉を見出すのである。

五六八

告白。——我々は我々の罪過を他の人に告白したときそれを忘れてしまふ。しかしながら他の人は通例それを忘れてしまはないのである。

五六九

自足。——自足の「金の羊毛」は、打擊に對する保障であるが、刺衝に對する保障でない。

五七〇

焰の中なる影。——焰は、それに照らされる者に明るいほど、それ自らに明るいものでない。賢い人もこれと同じである。

五七一

自分の意見。――我々が突然ある事柄について尋ねられるとき、我々に思ひ浮ばれる第一の意見は、通例我々自身の意見でなく、むしろただ、我々の階級や、地位や、家系などに屬する流行の意見たるに過ぎない。我々自身の意見は滅多に表面へ浮き出てゐるものでない。

五七二

勇氣の起源。――通常の人間は、彼が危險を見ないとき、それに對して如何なる目をももたないとき、勇者のごとく勇敢にして傷つけがたい。これに反して、勇者は、彼が如何なる目をもたないところに、即ち彼の脊にただ一の傷け得べき場所をもつてゐる。

五七三

醫師に於ける危險。――人はその醫者の爲めに生れてゐなければならぬ。でなければ彼は、その醫者によつて破滅する。

五七四

不思議な虛榮心。――三たび大膽に天氣を預言して成功を收めた人は、彼の魂の底に於て、彼の預言的天分に對する何物かを信ずるやうになる。我々は不思議なもの非合理的なものに信用を置く――それが我々の己惚に媚びる場合には。

五七五

職業。――一の職業は生活の脊椎骨である。

五七六

人格的影響の危險。――誰でも彼がある他の人に大なる內的の影響を及ぼしてゐると云ふことを感ずる人は、その人に全く自由なる手綱を與へなければならぬ。否、折々の反對を好んでむかへ入れたり、加之引き入れたりもしなければならぬ。でなければ、彼は避けがたく自分を敵にしてしまふであらう。

五七七

相續者の承認。――誰でも私なき精神に於て何等かの偉大なものを建設した人は、その相續者を養成することに心を用ひる。自分の事業のあり得べきすべての相續者に於て自分の敵手を見、彼等に對する防衛の情態に於て生活するのは、專制的な、卑劣な性質の徵證である。

五七八

生嚙り。――なまかじりは精通よりも戰ふ上に便利である。それは事物を、實際よりもより簡單なものとして取る。從つて彼の意見を、より解りよくより飲み込み易いものにする。

五七九

黨人たるに適しない。――多くを考へる人は、黨人たるに適しない。彼の考はあまりにはやくその黨派をむかうへ通りぬけてしまふのである。

五八〇

惡しき記憶。――惡しき記憶の利益は、人が同一の善き事物を、いく度びとなく初めて享樂すると云ふ點にあるのである、

五八一

自分を苦める。――思考の顧慮なさは屢々、昏迷を熱望するところの、そはそはとした心情の徵證である。

五八二

殉教者。――殉教者の使徒は殉教者よりも多く苦む。

五八三

浮誇の殘額。――浮誇であることを要しない多くの人々の浮誇は、彼等が自らを信ずべく何等の權

利をも有せず、その信仰をやつと、他の人々から小金で買ひ廻つてゐた時分よりの、大きくなつて今に殘つてゐる習慣である。

五八四

欲情の Punctum saliens（凸點）。――憤怒に、或は激烈な愛欲に陷らうとしてゐる人間は、魂が一の瓶のごとく一杯になつてゐる、しかしながら尙ほ一滴の水が、欲情への善き意志が加へられねばならぬところの一の點へ到着する（その善き意志はまた通例惡しき意志とも呼ばれる）。この箇條だけが必要である。さうすればその瓶から溢れて流れる。

五八五

不快な思想。――人間は森の中の炭燒竈のやうなものである。若い人々、も彼等が冷くなつて炭になつたとき、そのときはじめて有用になる。彼等が燻つたり煙つたりしてゐる限り、彼等は恐らくより面白いであらう。しかしながら無用で、またあまりに屢々寛ろげない。人類はその大なる器械をあつくする材料として容捨なく各個人を用ふる。しかしながら、すべての個人が（卽ち人類が）ただ其器械を支持する爲めにのみ有用なるとき、そのときその器械は何になるか？　それ自らが目的であるところの器械――それが Unnana commedia（人間喜劇）であるか？

五八六

人生の指時計。――人生は最高の意義をもつた希なる個々の瞬間から、また數知れぬ多くの間隔（その間に、たかだかそれらの瞬間の幻像が我々の周圍をさまよふのである）から成立する。愛や、春や、各の美しいメロディイや、山や、月や、海や、すべてのものが、ただ一度遺憾なく胸にまで話しかける――いやしくもそれが全く言葉へもつて來られるならば。なぜと云つて多くの人々は全然それらの瞬間を有しない。そしてそれ自ら現實生活のシムフォニイに於ける間隔であり斷音であるから。

五八七

攻擊或は妥協。――我々は往々にしてある傾向、或はある黨派、或はある時代を、猛烈に敵視すると云ふ過ちを犯す。なぜならば偶まただその皮相な方面を、その不完全な發育を、その必要につきまとつた『德の缺點』をのみ見たからである。恐らくは、我々自らがそれらの物に於て秀拔な部分を占め

たからであらう。そのとき我々は彼等に脊をむけ、正反對の進路を追ひ求める。しかしながら、より善き道は、強く善き方面を搜し出し、我々自らに於てそれを展開するにあるであらう。勿論、より鋭き眼とより善き意志とが、その出來かけのもの、不完全のものを促進する爲めに要せられる——その不完全の中を洞視してそれを否定するために要せられるよりも。

五八八

謙遜。——そこには本當の謙遜がある（卽ち、我々は我々自らの作つたものでないと云ふ知識がある）。そしてそれはまことによく大なる精神に適當してゐる。なぜならば、かくのごとき精神こそ完全なる責任性（それの作る善に對してすらも）の思想を捕捉し得るからである。人々は大なる人物が彼の力を感得する限りに於て、彼の不遜を憎まない。むしろ、彼が他人等を傷け、彼等を支配し、また彼等の如何に久しく堪へるかを見ることによつて、はじめて彼の力を證明しようと思ふ故に憎むのである。加之、これは通例力のしつかりした感じの缺乏を證據立てる。そして人々をして彼の偉大を疑はしる。めその限りに於て我々は賢明の見地からの不遜を知らなければならぬ。

五八九

その日の第一の思想。——各の日を善く始めるべき最善の道は、目がさめると共に、その日少くとも一人の人間に一の悅びを與へる得るかどうかを考へることである。もしもこれが祈禱の宗教的習慣の代用になり得たならば、我々の同胞はその變化によつて利益するであらう。

五九〇

最終の慰藉としての僭越。——我々が一の不幸を、精神上の缺陷を、病氣を解釋して、その內に我々の豫定された運命を、我々の試練を、或は我々の以前に犯したものの祕密の刑罰を見るならば、則ち我々はそれによつて我々自らの性質を面白いものにし、想像の中にて我々自らを我々の同胞の上にあける。尊大な罪人はあらゆる宗派に於て知れ渡つた人物である。

五九一

幸福の生育。——世界の哀みにすぐ近く、また屢々その噴火的地盤の上に、人間は彼の小さな幸福

の園を置いた。人が人生を見るに、ただそれから智識を求めるだけの人の目を以てするか、或は、それに屈服し、あきらめる人の目を以てするか、或は打ち克たれたる困難を悅ぶ人の目を以てするか、いづれにせよ、到處に彼は、不幸のそばに何等かの幸福が芽をのばしてゐるのを見出すであらう。しかも幸福が多ければ多いほど、いよいよその地盤は噴火的であつた。ただ、苦惱その物がこの幸福によつて是とされるやうに云ふのは滑稽であらう。

五九二

祖先等の通つて行つた道。——誰でも、その父または祖父が努力をむけたところの才能を、自分自身の上に一層發展させ、何等かの全く新しいものへ移つて行かないのは、道理にかなつたことである。でなければ彼は、どんな職業に於てでも、その完全に到達すべき可能性を自らから奪つてしまふのである。だから諺にも云つてある、『汝はどの道を騎つて行くつきか？——汝の先祖等の道を。』

五九三

教育者としての虛榮心と功名心と。——ある人がまだ一般的功利の道具にならなかつた限り、功名心が彼を苦めるかも知れない。しかしながらその標的まで來られたならば、すべての者の善にまで器械のごとく、必然性を以て彼が働くならば、則ち虛榮心が來るかも知れない。虛榮心は彼を小さな事柄に於て人間的にし、より社交的に、より忍耐强く、より思慮深くするであらう——功名心が荒つぽい仕事(彼を有用にすると云ふ)を彼の上に成しとげてゐたあとで。

五九四

哲學の入門者。——我々はある哲學者の智慧を取り入れたや否や、あだかも我々が造り變へられ、偉大なる人物になりでもしたかのやうな感情をもつて街を行く。なぜと云つて我々はただ、この智慧を知らないやうな人々をのみ見出し、また從つてすべての物に對し、一の新しい知られざる裁決を與へねばならないからである。我々は一の法典を承認する故に、今やまた我々自らを裁判官として處しなければならないのである。

五九五

不愉快にすることによつて愉快にする。——むしろ注意を呼んで、それによつて不愉快にしようと

する人々は、注意を呼んで愉快にしようとしない人々と同じものを欲望する。ただずつとより高き程度に於て、間接に、また彼等がよつて以て外觀上その目的から遠かるやうに見える一の階段によつて。彼等は影響と力とを意欲する。それ故に彼等の優越を、それが不愉快に感じられるほどにさへ示す。なぜと云つて彼等は知つてゐる——遂に力を獲得した者は、彼が爲し且つ言ふところの殆んどすべての物に於て愉快にすると云ふこと、また彼が不愉快にする場合にすらも、尙ほ且つ彼は愉快にするやうに見えるといふことを。自由精神も、竝びに信仰者も、よつて以て愉快にすべく力を意欲する。彼等の教說のために一の惡しき運命や、迫害や、牢獄や、處刑が彼等を脅かすとき、彼等は彼等の教說がかく人間に彫り刻まれ、燒きつけられるであらうと云ふ考を樂むのである。彼等は彼等の運命を、尙ほ力を獲得するための、一の痛ましきしかしながら力强き手段として受取る——その効果はずつとさきになつて現れるのだけれど。

五九六

戰爭の理由（Casus belli）及び類似のこと。——隣國と戰爭することに決心した場合、それに對して戰爭の理由を發明するところの君主は、丁度自分の子供に、爾今母親として見做さるべき一人の母親を押しつけるところの父親のやうなものである。そして我々の行動に對する公表されたる殆んどすべての動機なるものが、丁度かくのごとき押しつけられたる母親なのではあるまいか？

五九七

欲情と權利と。——何人と云へども、魂の底に於て自分の權利に對する疑ひを有する人間より、より熱烈に自分の權利を口にしない。彼はその欲情を自分の側へ引きよせることによつて、悟性とその疑ひとを昏惑させようとする。かくして彼は良心を獲得し、それと共に同胞に對する成功を獲得する。

五九八

諦める者の術。——結婚に對して抗議するところの者は、加特力の僧侶のやりかたに從つて、その最も低劣な最も卑俗な考方に於てそれを考へようとするであらう。同じやうに、同時代者の間に於ける名譽を斥ける者は、それに對する低劣な概念をもつてゐるであらう。かくして彼は禁欲と、それに對する戰ひとを容易にするのである。加之、一體に多くを諦める者は、小さな事物に於てたやすく自

らを繰まにする。同時代者の喝采を超越した人間が、尙ほ且つ小さな虛榮の滿足を諦め得ないと云ふのは、あり得べき事であつたらう。

五九九

借越の年齢。――天分ある人々に於ては、二十六歳から三十歳までの間に、本當の借越時期が横つてゐる。それは酸味の大なる殘物をもつた最初の成熟時代である。我々自らの內に感得するところのものを根據として、我々は、それをあまり見ない、もしくはまるつきり見ない人々から、尊敬と謙遜とを要求する。そして此等のものがなかなかやつて來ないとき、我々は、鋭い目や耳があの年頃のあらゆる產物――それが詩であらうとも、哲學であらうとも、乃至は繪畫や音樂であらうとも――に於て認知するところの、あの顏付や、生意氣なあの態度や、あの聲の調子なぞによつて復讐する。經驗のつんだより年上の人々は、それに對して微笑する。そして心を動かされながら、この美しい年齡――そのとき人は左樣に多くの物でありながら、左樣に僅かな物に見えると云ふ運命を怨み憤るのである――を思ひ浮べる。のちには人は實際より多くの物に見える。しかしながら人は恐らく多くの物であると云ふ善き信仰を失つたであらう――人が一生の間矯正することの出來ない浮誇の痴人として止まるにあらざれば。

六〇〇

虛妄のしかしながら防衛的の。――我々が淵を越え、或は一本の梁材によつて深い川を渡るべく、一の欄杆を要する――それにつかまる爲めでなく(なぜならば、それは直に我々と共に壞れ落ちてしまふであらうから)、むしろ安全といふ表象を目にまで與へるために――ごとく、青年としての我々は、無意識的に我々に對してあの欄杆の役をつとめようとするやうな人々を要する。固より、我々が本當に大なる危險に際して彼等へよりかからうとしたならば、彼等は我々を助けないであらう。しかしながら彼等は近くに保護者があると云ふ、落ちつかすところの感じを與へてくれる(例へば父や、教師や、友人などがいづれも通例あるごとく)。

六〇一

愛することを學ぶ。――人は愛することを學び、深切であることを學ばなければならぬ。しかもこれを小さい時分からして學ばなければならぬ。教育と偶然とがこの感情を實習すべき何等の機會をも

我々に與へないときは、我々の魂はひからびたものになつてしまふ。そして愛情のある人々のあるディリケエトな企てを理解することさへも出來なくなつてしまふ。同樣に、憎しみも學ばれ育てられなければならぬ——人がしつかりした憎惡者にならうと思ふならば。でなければ憎しみの萠芽もだんだん死んで行つてしまふであらう。

六〇二

裝飾としての廢墟。——多くの精神上變移を經て來たやうな人々は、以前の情態からの若干の見解や習慣を保存してゐる。それらのものはやがて一個の說明しがたき事物か、灰色の圍壁かのごとく、彼等の新しき思考や行爲へ凸出して來る。そして往々その邊全體の飾りになる。

六〇三

愛情と尊敬と。——愛情は欲求し、恐怖は逃避する。人が同じ人間から、少くとも同じ時に於て、愛されたり尊敬されたりすることの出來ない所以である。なぜと云つて尊敬するものは權力を認める。卽ち彼はそれを恐れる。彼の情態は畏敬である。しかしながら愛情は何等の權力をも、分離したり、切斷したり、統轄したり、從屬したりするところの何物をも認めない。愛情が尊敬せぬ故に、功名心の强い人々は內密にもしくはおほつぴらに、愛されることに對して反抗する。

六〇四

冷かな人間に有利なる憶斷。——速かに熱する人々は速かに冷くなる。そしてそれ故に大體に於て賴みにならない。そこで、いつも冷かな、もしくは冷かであるやうに裝ふところのすべての人々には、それが特に信用すべき、賴みになる人間だと云ふやうな都合のいい憶斷がある。彼等は徐々に熱して來て、久しくそれを持續するところのそれらの人々と混同されてゐるのである。

六〇五

自由なる意見に於ける危險。——自由な意見を以てする輕易なる仕事は、一種の庠さのごときチァアムを有する。もし人がだんだんとそれに從つて行くならば、彼はその場所を搔きはじめる、そして遂には、一開いた痛ましき傷口を生じて來る。云ひ換へれば、自由な意見が我々の生活の地位に於て、我々の人間的關係に於て我々を擾し苦めるべく始めるのである。

六〇六

深刻な苦痛に對する渇望。――欲情がすぎ去つたとき、それはそれ自ちのあとに一の曖昧なる憧憬をのこす。そして消え去るときに於ても、一の誘惑的な眼差(まなざし)をなげる。その鞭を以て打たれたことさへ、一種の悦樂を與へねばならなかつた。それに比べれば、より程よき感覺はあつけなきものに思はれる。我々はやつぱり、弱々しい悦樂よりも、むしろより激烈な不快を欲するもののやうである。

六〇七

他の人々と世界とに對する不滿。――左樣に屢々起るごとく、我々が我々の不滿を他の人々の上に漏らすとき――我々がそれを實際には我々自らについて感じてゐながら――我々は全く我々の判斷を曖昧にし誤魔化してしまふことにつとめてゐるのである。我々は他の人々の過失缺點の中に、此不滿に對する後天的の動機を見出さうと思ふ。さてかくして我々自らを見失つてしまふ。自分自身に對して容赦なき審判者であるところの、宗教的に嚴酷なる人々は、同時にまた一般人類の惡について最も甚だしく述べた。自分自身に罪惡を、他の人々に德を留保して置くやうな聖徒は曾つてなかつた――佛陀の規定に從つて、人々の前に自分自身の善をかくし、人々をして自分の惡をのみ見せしめるやうな人間が曾つてなかつたごとく。

六〇八

原因と結果との混同。――無意識の中に我々は、我々の氣質に適當したところの主義や意見を求める。そこで遂には、その主義や意見が我々の性格を作り、それに持續性と確實性とを與へたかのやうに思はれて來る――丁度反對の事が起つてゐたのだけれど。我々の思考や判斷はつまり我々の性質の原因にされねばならないやうに見える。しかしながら事實上我々の性質は、我々がさう云ふ具合に考へたり判斷したりすることの原因なのである。さて何物が我々を斯うした殆んど無意識の喜劇へ導くのか？　無精(ぜい)と御都合とである。また少からず、全く一貫した、性質及び思考の上に同種的なものとして見做されようと云ふ浮誇なる願望である。なぜと云つてこれが尊敬を獲得し、信任と力とを與へるからである。

六〇九

年齢と眞實と。――年若き人々は面白い事と異つた事とを愛する――それが眞實であるか虚僞であるかには頓着なく。より年の行つた人々は、面白い事異つた事を、それが眞實であるときに愛する。最後に圓熟し切つた頭腦の人々は、眞實が素樸に單純に見え、また通常人を退屈させるやうなところに於てすらも、眞實を愛する。なぜならば彼等は、眞實が單純の外貌を以て、その所有するところの最高のものを語るのを、常とすることを知つてゐたからである。

六一〇

悪しき詩人としての人々。――丁度悪しき詩人が詩の後半に於て韻律にはまつた思想を求めるごとく、人々はより臆病になつた生涯の後半に於て、彼等の前半生に適應した行動や、地位や、關係を求めるのを常とする。その結果は、外部的にはすべてがうまく行つてゐる。けれども彼等の生活はもはや力強い思想から支配され、たえず新に決定されるのでなく、むしろそれの代りに、一の韻律を見出さうと云ふ意向だけが現れる。

六一一

退屈と遊びと。――必要は我々を勞作――その結果を以て必要が和らげられる――にまで強ひる。必要の常に新しき覺醒が我々を勞作に慣れさせる。しかしながら、必要が和らげられて、謂はば眠つてゐる間隙に於て、退屈が我々を襲ふ。退屈は何であるか？　それは、今やそれ自らを新しき附加的必要として感じさせるところの、勞作への慣熟である。それはいよいよより強いであらう――誰かが勞作するに慣れればなれるほど、加之恐らくは、誰かが必要に苦められれば苦められるほど。退屈を免れるために、人は彼の從前の必要以上に勞作する。或は彼は遊びを工夫する。云ひ換へれば、一般に勞作に對する必要のほか如何なる必要をも和らげないやうな勞作を工夫する。遊びに飽きた、そして彼を勞作に強ひる何等の新しき必要をも有しない人は、時々第三の情態への願望から襲撃される。その第三の情態は遊びに對して、動搖の舞踏に對する關係を、舞踏の歩行に對する關係を有つて居り、一の幸福な、安らかな運動である。それは藝術家や哲學者の幸福に對する幻像である。

六一二

畫像からの教訓。――若しも我々が、最終の幼年時代から成年時代へ至るまでの、自分自身の畫像の一列を考察するならば、我々は愉快なる驚きを以て見出すであらう――大人が青年によりも幼年

により多く似てゐると云ふことを。それ故恐らくは、斯うした事實に相應して、根本的性格からの一時的離反が中間に介在してゐたと云ふこと、また、それを大人の集積集中された力が再び支配するに至つたと云ふことを。かくのごとき觀察は今一の觀察と一致してゐる。曰く、我々の青年時代に於て我我を引き廻したところの、欲情や、教師や、政治上の事件などからのあらゆる力强い影響は、その後また一の確乎たる標準へ引きもどされるやうに見える。なるほどそれらのものは我々の内に生きつづけ働きつづけてゐる。しかしながら我々の根本的感情や、根本的意見が今や優勢になつてゐる。そして、それらのものを恐らく力の源としては用ひるけれど、もはや二十歳頃に於けるがごとく統制者としては用ひない。かくのごとく大人の思想や感情すらも、彼の幼年時代のそれとより多く一致してゐる。そしてこの内的事實は上述の事實に表白されてゐるのである。

六一三

異つた年齢の聲の調子。――年少者が語り、賞讃し、非難し、詩作するときの聲の調子は、年の行つた人々に面白くない。なぜならば、その調子があまりに癇高く、しかも同時に、圓天井の内の調子のごとくからつぽではつきりしてゐない（圓天井はその空虛によつてあのやうな高鳴りをするのである）からである。けだし年少者の考へる大抵の事は、彼等自身の本性から流れ出ないで、むしろ彼等の近くで考へられ、語られ、賞讃され、非難されたものの共鳴であり反響である。しかしながら彼等の感情（好惡）がそれに對する理由よりもずつとより强く反響するので、彼等がその感情を公表する時には、理由の缺乏もしくは貧弱に徵證となるやうな、あのからつぽな癇高な調子を生ずるのである。より熟したる年齢の調子は嚴格で、簡潔で、程々に高い。けれどもすべての齒切よく發音されたもののごとく甚だ遠方にまで達する。最後に老年は屢々その聲の調子にまで一定の溫良と思慮とをもつてゐる。そして謂はばその味を甘くする。勿論多くの場合に於てその味を酸つぱくもする。

六一四

取り殘された人間と先き走りをしてゐる人間と。――不信で一杯になつてゐるところの、同業者や隣人のあらゆる幸福な成功を妬ましく感ずるところの、異つた意見に對して暴烈に憤激するところの不愉快な性格は、彼が文明の前の階段に屬してゐる、從つて殘りものであると云ふことを示す。なぜと云つて、彼が人々と交際するときの方法は、武斷政治の時代に於てのみ正當なものだつた。彼は取り殘された人間である。今一の性格は悅を共にする心に富んで居る。到處に友人を拵へる。すべての

成長するもの、出來上るものを可愛ゆく思ふ。他人のあらゆる名譽と成功とを慶賀する。そして自分ひとりで眞實を知らうと云ふやうな何等の特權をも要求しないで、むしろ謙讓なる不信にみちてゐる。かくのごときは人類のより高き文明の方へ努力して行くところの、先き走りをしてゐる人間である。あの不愉快な性格は、人間的交際のお粗末な土臺がこれから置かれねばならぬと云ふやうな時代から由來してゐる。今一の性格は文明の最高層に生きてゐる——穴倉の中に、文明の基礎の間にとぢ込められて、暴れ廻り咆え立てたりしてゐるところの、あの野獸から出來るだけ遠く離れて。

六一五

ヒポコンデルの患者に對する慰藉。——ある偉大なる思想家が一時的にヒポコンデル的な自己苛責に陷つたとき、彼は自らを慰める爲め言ふがよい、『この寄生物が自らを養つて成長するのは、汝自身の偉大なる力によつてである。もしもそれがより小さなものであつたならば、則ち汝はより少く苦めばよかつたであらうと。政治家も丁度同じやうに言ふがよい——嫉妬心や復讐心が、一般的に云へば、bellum omnium contra omnes（總てのものと總てのものとの戰爭）の聲（それに對して彼は、ある國民の代表者として必然に一の强大なる天分を有しなければならぬ）が、折々彼の個人的關係にまで侵入して來て、彼の生活を困難にする場合。

六一六

現在から絶縁される。——自分の時代から一たび大なる程度に於て絶縁され、謂はば、その岸から過去の世界觀の大海原へ逐ひ返されてしまふのには大なる利益がある。そこから岸邊の方を見れば、人は恐らく初めてそれの全形態を望見する。そして再びそれに近づくとき、人はかつてそれを見棄てなかつたそれらの人々よりも、大體に於てより善くそれを理解すると云ふ利益を有する。

六一七

個人的缺點の上に播いたり苅つたりする。——ルッソオのごとき人々は、彼等の弱點や缺點や惡德を、謂はば彼等の才分の肥料として用ふることを知つてゐる。ルッソオが社會の腐敗や墮落を文明の悲むべき結果として慨嘆するとき、その底には一の個人的經驗が横つてゐる。その經驗の苦々しさが彼に彼の一般的彈劾の鋭さを與へ、彼が射出すところの箭に毒を塗つてゐる。彼は彼自らを先づ個人として釋放する。そして一の治療法——直接には社會を利するけれども、間接に、また社會によつて、

彼をも利するやうな――を手に入れようと考へる。

六一八

哲學的な心を有つてゐる。――通例我々は、あらゆる人生の境遇や事件に對して一の心的態度を、見解の一の種類を獲得しようと努める。それは專ら、哲學的な心を有つてゐると稱せられる。しかしながら知識を豐富にする爲めには、かくのごとく自己を一樣化しないで、むしろ人生の種々な境遇の低い聲に聞く方が、より高き價値をもつてゐるかも分らない。此等のものはそれ自らの見解を齎らすのである。かく我々は、我々自らを固定した、持續的な一個體として取扱はないことによつて、多くの人々の生活や性質に認識的の興味をとるのである。

六一九

侮蔑の火の中に。――人がそれを抱くべく恥づべきことに思はれるやうな見解をはじめて發言するを敢てするとき、それは獨立への新しき一歩である。そのときは友人や知己すらも氣遣はしくなり出すが常である。天分ある性質はまた此火の中をも通りぬけなければならぬ。それはそのあとでずつと

より多くそれ自らに屬して來る。

六二〇

自己を犧牲にする。――選擇の場合に於ては、大きな犧牲が小さな犧牲よりもさきにとられる。なぜならば我々は、自己を讃嘆すること――これは小さな犧牲の場合に不可能である――によつてその大きな犧牲に償ひをするからである。

六二一

術策としての愛。――何等かの新しいものを本當に知らうと思ふ人は（それが人間であらうとも、事件であらうとも、書物であらうとも）、その新しいものを、あり得べきすべての愛を以て取り上げるのが、その中に敵意あるやうに厭はしく、虛僞らしく見えてゐるすべてのものから、速かに目をそらしてしまふのが、否、それを忘れてしまふのが上策である。乃ち例へば、ある書物の著者に最大のスタートを與へ、直ぐさま、丁度斷け比べに於けるが如く胸をどきつかせながら、彼がその標的に達するのを熱望するのである。斯樣にして人は新しき事物の心髓にまで、その動いてゐる點にまで透徹する。

そしてこれこそ、それを知ることと云はれるのである。この階段へ達すれば、悟性がそのあとで制限を設ける。この過重と、批評的振子のこの一時的停止とはまさに、ある一の事柄の魂を誘ひ出す爲めの術策たるにすぎなかつたのである。

六二二

世界をあまりに善くあまりに悪しく想ふこと。——我々は事物をあまりに善く、もしくはあまりに悪しく思ふことによつて、つねに一のより高き悦びを收穫する。なぜと云つて、一のあまりに善き先入見を以て我々は通例、事物(經驗)が本當にもつてゐるより以上の甘さをそれに置く。一のあまりに悪しき先入見は一の愉快なる幻滅をひき起す。事物そのものに横つたところの愉快は、驚愕の愉快によつて增加される。もつとも、陰氣な氣質は双方の場合に於て正反對の事を經驗するのである。

六二三

深味のある人々。——印象を深くすることの中にその強さを有するやうな人々は——彼等は通例深味のある人々と呼ばれる——あらゆる突然の事件に際して比較的に平然としてゐる、毅然としてゐる。なぜと云つて初めの瞬間にはその印象がまだ淺薄であつた。彼はそのときやつと深くなるのである。しかしながら久しく豫想され期待されてゐた物とか人とかは、かくのごとき性質の人々を最も甚だしく動かす。そしてそれが遂にやつて來たとき、尙ほ精神の落ちつきを保持することを殆んど不可能ならしめる。

六二四

より高き自己との交際。——各人は彼がそのより高き自己を見出すとき彼の善き日を有する。そして本當の人道は、人がただこの情態に於てのみ評價され、不自由と隷從との仕事日に於て評價されないことを要求する。例へばある畫家は、彼が見たり表現したりなし得たるその最高の幻像に從つて、賞讃されたり尊敬されたりしなければならぬ。けれども人々自らは、かうした彼等の最高の自己と甚だ異つて交際する。そして屢々彼等自らの俳優である——彼等がそれらの瞬間に於てあるところのものを、あとでいつも模倣してゐる限りに於て。多くの人々はその理想に對する恐怖と屈從との中に生きてゐる。そしてそれを否定したがるであらう。彼等はそのより高き自己を恐れてゐる。なぜならばそれは、口を開けば僭越な事を言ふからである。その上、それは思ひのままに歩き廻つたり立ちど

まつたりする幽靈のやうな自由をもつてゐる。それ故にそれは屢々神々からのかづけ物と云はれる。しかし實際は、ほかのあらゆる物は神々(偶然)からのかづけ物であるけれど、これは人間そのものである。

六二五

寂しき人々。——ある人々は自分ひとりとのみあることに左樣に甚だしく慣れてゐる——彼等がまるつきり他の人々と自分を比較しないで、むしろ靜かな樂しい心持に於て、自分自身との善き會話の中に、否笑ひながらにさへ、彼等の獨自的生活を紡ぎつづけて行くほどに。しかし乍ら、もしも彼等が他の人々と自らを比較するところへ連れて行かれるならば、彼等は彼等自らに對する沈思的な見くびりに傾いて來る。乃ち彼等は自分自身に對する善く且つ正しき評價を、先づ他の人々から學び直すべく強ひられねばならないのである。そしてこの獲られたる評價からさへも、彼等は始終なにがしかを値切らうとするであらう。されば我々は、ある人々の獨居を許してやらねばならぬ。そして屢々起るごとく、その獨居の故に彼等を不憫がるほどに愚かであつてはならぬ。

六二六

メロディイなしに。——ある人々には、自分自身の中にじつと休息してゐること、竝びにそのすべての能力を調和よく片附けて置くことが、左樣にふさはしい事なのである——彼等にまで、各の標的を定めた活動が厭はしいほどに。彼等は專ら長く引きのばされた調和ある協和音からのみ成立する——組織され元氣づけられたるメロディイへの傾向さへも現れることなしに——ところの一の音樂に似てゐる。すべての外的な運動はただ、小舟にまで調和ある好音調の海の上に直ぐにまた、その新しき平衡を與へることに役立つだけである。近代の人々は甚だ苛立たしくなつて來るのが常である——何物にもならないやうな、但し、何物でもないとは云はれないやうな性質に出會ふとき。しかしながら或る心持にあつては、彼等の見えることがあの異常な問ひを起させる。曰く、『そもそもメロディイは何の爲めにあるか？　人生がある深い湖水に靜かな姿を映してゐるとき、何故にそれが我々にまで十分でないか？』中世は現代よりもかくのごとき性質の人間に富んでゐた。今日では、群衆の中にあつてさへ左樣に平和に、自らに滿足して生存し行くことが出來、ゲエテのごとく自分自身に『最も善きものは深き靜寂である。その中で私は世界に反對して生き且つ育つ。そして、世界が火と劍とを以

てしても私から取り得ないものを獲るのである』と言ふところの人間と、如何にまれに行き會ふことぞ？

六二七

生活し經驗する。――ある人々は彼等の經驗――彼等のつまらない、ありふれた經驗――を、それが年に三四の果實を產するやうな耕地になるほど、左樣に取り扱ふことを知つてゐる。これに對して他の人々は――そして如何に多數の人々であるかよ！――最も刺戟的な運命の波に、最も多樣なる時と人との流れに押しやられてゐて、しかも常に輕々と、コルクのごとくつねに浮いてゐる。この事實を觀察すれば我々は遂に、人類を二通りに區別して見たくなつて來る。その一は、少しのものから多くのものを作ることを知つてゐるやうな少數の人々（最少數の）である。今一は、多くのものから少しを作ることを知つてゐるやうな多數の人々である。全くのところ我々は、皆無から世界を作る代りに、世界から皆無を作るところの、あの途方もない魔法使ひに出會ふのである。

六二八

遊びに於ける眞面目さ。――ゲヌアに於て、ある夕暮に私は、一の塔から長い鐘の音の鳴り渡るのを聞いた。それはいつ果つべしとも思はれなかつた。そしてそれ自らに飽くところを知らないやうに、市街の喧噪の上を、夕の天と海の空氣とにまで、左樣にぞつとするやうに、同時にまた左樣に子供らしく、左樣に物悲しく鳴り渡つた。そのとき私はプラトオの言葉を思ひ起した、そして忽ちそれが胸へ押し入つて行くのを感じた。曰く、『すべての人事はいづれも皆、大なる眞面目さを値しない。それにも係はらず……』

六二九

確信と正義とに就て。――人が欲情の中に言つたり、約束したり、決定したりしたところのものに、その後冷靜に落付いてから始末をせねばならぬと云ふ、この要求は人類を壓迫するところの最も苦しい重荷の一である。憤怒や、燃えるやうな復讐や、狂熱的な歸依なぞの結果を、すべての將來に亙つて承認せねばならぬと云ふのは、此等の感情に對していよいよ大なる苦々しさを刺戟するかも知れない――これらの感情に對して到處に、とり分け藝術家から偶像禮拜がされればされるほど。彼等は欲情の評價を大きく培養する。そしていつもさうして來た。勿論彼等は又、人が自分自身の上に取ると

ころの欲情の恐ろしき滿足を、あの復讐心の爆發を、それにつづく死や、手足の切斷や、自らなすところの追放や、破れた心のあのあきらめなぞを以て立派なものにする。いかなる場合にも彼等は欲情に對する好奇心を生き生きとさして置く。それはあだかも、彼等が『汝等は欲情なしには全く何物をも經驗しない』と言はうとしたかのやうである。なぜならば我々は忠誠を誓つた（恐らくは神のごとき純粹に虛構の物にまでさへも）からである。なぜならば我々はある君主へ、ある黨派へ、ある婦人へ、ある僧團へ、ある藝術家へ、ある思想家へ、我々の心を渡した――我々の上に疑惑を置いたところの、そしてそれらの事物をして各の崇敬、各の犧牲を値するものと見えしめるところの盲目的狂想の情態に於て――からである。今我々は離れがたくしつかりと結びつけられてゐるか？　否、そのとき我々は自分を欺かなかつたか？　そこには一の假說的約束はなかつたか？――我々の自らを捧げたるそれらの事物が實際、我々の表象の中に現れたやうな事物であつたと云ふ、もとより暗默なる前提の下に於て。我々は我々の誤謬に忠誠であるべき義務があるか？　我々がこの忠誠によつて我々のより高き自己に害を及ぼすと云ふことの洞察を有しながらさへも。否、そこにはさうした種類の如何なる律法もなく、如何なる義務もない。我々は裏切者になり、不忠を行ひ、我々の理想をつねに棄てなければならぬ。我は人生の一の時期から他の時期へ進み入ることが出來ない――裏切の此等の苦痛を引き起すこと

と、それからまた苦むこととなしには。此等の苦痛を免れる爲めに、我々の感情の平衡に對して警戒せねばならぬと云ふことが必然であつたか？　そのとき世界は我々にとつてあまりに荒涼たるもの、あまりに幽靈のやうなものにならぬであらうか？　むしろ我々は、此等の苦痛が確信の變化に際して必然であるかどうか、またそれらのものが間違つた意見や評價の前に依賴するかどうかを、我々自らに問はうと思ふ。何故我々は、その確信に忠誠なる人間を嘆賞し、それを變更するところの人間を輕蔑するか？　私はその答が次ぎのやうなものであらねばならぬことを恐れる。曰く、『各の人はかくのごとき變化がただより一般的な功利もしくは個人的な煩ひの動機によつてのみ引き起されると云ふことをするから』と。云ひ換へれば、我々は實際に、何人も彼の意見を變更しない――それが彼に有利である限り、もしくは少くとも、それが彼に如何なる害をも來さない限り――と云ふことを信ずる。しかしながら、もしさうであるならば、その事の中にはあらゆる確信の理智的重要についての證據がある。我々をして、如何にして確信の成立するかを吟味せしめよ。我々をして、それが甚だしく過重されないかどうかを見せしめよ。さうすれば、確信の變化もまたあらゆる事情の下に、一の間違つた標準に從つて批判されると云ふこと、又、我々がこれまで此變化からあまりに甚だしく苦むのを常としたことは知れるであう。

六三〇

確信は認識の如何なる事柄に於ても、絶對の眞實を所有してゐると云ふことの信仰である。さればこの信仰は、そこに絶對の眞實のあることを豫想する。また、それを獲得すべくそれらの完全なる方法が見出されたことを豫想する。そして最後に、確信を有する各の人が、此等の完全なる方法を用ひることを豫想する。三の觀念のすべては直に、確信の人が科學的思考の人でないことを示す。彼は理論的無邪氣の年齢に於て我々の前に立つてゐる。そして如何に他の點で成長してゐようとも、尙ほ小兒である。しかしながら幾世紀の全體がそれらの子供のやうな假定の中に生きて來た。そしてそれらの假定から人間の最も大なる力の根源が流れて來た。自分の確信のために自分を犧牲にした數知れぬ人々は、それを絶對の眞實の爲めになしつつあつたかのやうに思つた。しかし彼等はすべて皆間違つてゐた。恐らくまだ何人も眞實のために自分を犧牲にしなかつにであらう。少くとも彼の信仰の信條的表白は非科學的或は半科學的であつたであらう。しかしながら實際人々はその目的を遂げようと思つた。なぜならば彼等は、正しくあらねばならぬと思つたからである。彼等の信仰を彼等から引きはなさせるのは、恐らく彼等の永久の救ひを疑はしいものにしてしまふことを意味したであらう。かうした極めて重要な事柄に於ては、『意志』があまりに明らかすぎるほど理智の助言者であつた。各の方向に於ける各の信仰者の前提は、辯駁され得ないと云ふことであつた。よしその反證が甚だ強力になつて來たとしても、尙ほ且つ彼には、一般に理性を譏謗することが、また恐らくは credo quia absurdum est.(私はそれが理窟に合はないからそれを信ずる)を極端な狂信の旗印として押し立てることさへもが殘つてゐる。歴史を左樣に騷々しくしたのは、さまざまな意見の葛藤でなく、むしろ意見に對する信仰、卽ち確信の葛藤である。もしも、その確信をあんなにまで大きく考へ、あらゆる種類の犧牲をそれへささげ、また名譽や、身體や、生命なぞをその用に立てることを惜まなかつたすべての人々が、彼等の力の半ばをでも、「如何なる權利を以て彼等がこの確信に、もしくはあの確信に拘着するか、如何なる道を通つて彼等がそれらの確信へ來たか」の吟味にささげたことならば、人類の歴史は如何に平和に見えたことであらうぞ！　認識された如何により多くの物があるであらう！あらゆる種類の異端者等の迫害に關聯したすべてのむごたらしき光景は、二の理由からなくされることが出來たであらう。先づ第一には、糺彈者等が何よりも先づ彼等自らを糺彈したであらう。そして絶對の眞實を擁護するといふ僭越を承認したであらうから。次ぎには、異端者等自らも、あらゆる宗教上分派や『正統派』の信條のごとき、あんな根柢のお粗末な信條に對しては、彼等がそれを吟味して見たあとでは、

もはや何等の興味をもたなかつたであらうから。

六三一

人々は、絶對的眞實の所有を信ずることに慣れてゐた時代から、どんな認識の問題に關しても懷疑的相對主義的態度をとることに對する深い嫌惡の情が由來してゐる。彼等は多くの場合好んで、權威ある人々(父とか、友人とか、教師とか、君主とか云ふやうな)の有する確信に、善くも惡しくも服從する。そしてそれをしないとき、一種の良心の苛責を經驗する。この傾向は全く理解し得べきことである。そしてその結果は人間理性の發展に對する激烈なる非難にまで何等の論據をも信ずるものでない。しかしながら人間に於ける科學的精神は、漸次思慮深き差控への德を成熟させなければならぬ。理論的生活の領域に於てよりも實際的生活の領域に於てより善く知られてゐるやうな、また例へば、ゲエテが『アントニオ』に於て、すべてのタッソオに對する、云ひ換へれば非科學的であると同時に非活動的な性格に對する刺激の一對象として表現したところの、あの賢き節度を熟させなければならぬ。確信の人々は、細心なる思考のあの人間を、あの理論的なアントニオを理解せぬことの權利を自分自身の中にもつてゐる。これに反して科學的な人間は、その爲めに前者を非難すべき何等の權利をも有し

ない。彼はそれを大目に見て置く。そしてあまつさへ知つてゐる、ある場合には前者がやはり彼に拘着するであらうことを――タッソオが遂にアントニオに拘着するごとく。

六三二

さまざまな確信を通過したのでなく、むしろ最初につかまへた信仰に拘着してゐるところの人は、あらゆる事情の下にあつて、丁度この不變の故に、取り殘されたる文明の一代表者である。彼は文化(それはつねに造形性を豫想する)のこの缺乏と相應して、峻酷で、無思慮で、敎へがたく、寬容を有しない。不斷の猜疑者であり、無鐵砲な人間であつて、彼の意見を押し通すべくあらゆる手段をつかむ。なぜならば彼は、他の意見があらねばならぬといふことを、全く了解し得ないからである。かくのごとき見地よりすれば、彼は恐らく一の力の源である。そして、あまりに自由にだらしなくなつた文明を癒す効能をさへもつてゐる。但しそれは、彼が彼に反抗するやうに刺戟するからに外ならない。なぜと云つてそれによつて、彼との戰に强ひられたる新文明の虛弱な組織がそれ自身强壯になつて來るからである。

六三三

我々は本質的な部分に於ては、依然として宗教改革時代の人々と同じ人間である。また如何にして同じ人間たらざるを得ようぞ？　しかしながら我々が、我々の意見に勝利を獲さすべくある手段をもはや我々自らに許さないと云ふ事實は、我々をあの時代から區別する。そして我々が一の高き文明に屬してゐることを證明する。今日尙ほ宗教改革時代の人々のやり方に從つて、誹謗や憤激を以てさまざまな意見と戰ひ、それを打ち倒すところの人は明白に暴露する——彼が他の時代に生きてゐたならば、その敵手を燒き殺したであらうと云ふことを、又、彼が宗教改革の敵手として生ききてゐたならば、あらゆる糺問の手段を盡したであらうと云ふことを。糺問はあの當時もつともなことだつた。なぜと云つてそれは、教會の全領域の上に布かれねばならなかつたところの普遍的戒嚴令のほかの何物をも意味しなかつたから。そしてそれは各の戒嚴令のごとく、勿論次ぎのごとき假定（我々が今日もはやそれらの人々と分たないところの）の下に、前もひどい手段をも正當としたのである。曰く、人々は教會に眞實をもつてゐる、そして人類の救濟のために、どんなにしてでも、如何なる犧牲を拂つてでもそれを保存せねばならぬと。しかしながら今日では、人はもはや何人にも、彼が眞實をもつてゐると云

ふことを左樣にたやすく認容しない。檢覆の嚴烈なる方法は、十分なる不信用と警戒とをひろげさしたので、言や行に荒つぽく意見を辯護するところの各の人間は、我々の今日の文明の敵と見做される、少くとも取り殘された人間と見做される。云ふまでもなく、人が眞實を所有してゐると云ふ感奮は、眞實探求のあの、たしかによりおだやかな、より靜かな感奮（それはいくたびでも繰返して吟味し直すことに勞れない）に比べれば、今日甚だ僅かの値を有するにすぎない。

六三四

その上、眞實の秩序立つた探求そのものは、いろいろの確信が互に戰ひ合つてゐたそれらの時代の成果である。もしも個人が彼の『眞實』に、云ひ換へれば彼の目的をとげることに心を用ひなかつたならば、そこには研究の如何なる方法もなかつたであらう。しかしながら斯く、絕對的眞實に對するいろいろの個人の要求の永久の葛藤によつて、人々は歩一歩論駁すべからざる原理——それに從つて要求の權利が吟味され、爭ひが解決され得べきやうな——を見出すべく進んだ。初めに人々は權威に從つて決定した。のちには彼等はよつて以て外觀上の眞實が見出されたところの方法及び手段を批評し合つた。その間のある時期に、人々は敵手の理論の歸結を演繹し、恐らくはそれを有害に且つ不幸にする

ものとして見出した。さてそれから、各の人々にとつて、敵手の確信は一の誤謬を包有したと云ふ判斷が出て來た。思想家等の個人的闘爭は遂に甚だしくその方法を鋭くした――實際に眞實が發見され得たほどに、また、まへの方法の誤りが各人の眼前へ暴露されたほどに。

六三五

一體に、科學的方法は少くとも、如何なるほかの成果とも同じほどに重要なる研究の成果である。なぜと云つて科學的精神は方法に對する智識に土臺を置いてゐる。そしてその方法が失はれたならば、科學のあらゆる成果は、迷信と荒唐無稽との新しく流行するのを防止し得なかつたであらう。賢明なる人々は、彼等の欲するだけ多く、科學の成果を學ぶかも知れない。しかしながら人はやはりまだ彼等の會話の中に、とり分け彼等が爲すところの假定の中に心付く――彼等に科學的精神が缺けてゐると云ふことを。彼等が思考の横道に對するあの本能的の不信用（各の科學的な人間の心の中に、長い練習の結果その根を下ろしてゐたやうな）をもたなかつたと云ふことを。ある事柄に關して何等かの假說を見出すのが彼等にとつて十分な事である。さうすれば彼等はそれに對してすつかり熱中してしまふ。そしてそれによつてその事柄が片附いたやうに思ふ。彼等にあつては、一の意見をもつと云ふのは、それに對して狂信的になるの謂ひである。また結局それを確信として胸にたたみ込むの謂ひである。說明されない事柄の場合には、彼等はその說明に似てゐるところの、彼等の頭へ來る第一の落想に對して熱中する。それからして、とり分け政治の世界に於て、絕えず最惡の結果が出て來る。それ故今日、各人は少くとも一の科學を徹底的に學ばなければならなかつた。なぜと云つて、そのときは彼は、何が方法であるかを、また最上の思慮が如何に必要であるかを知つたからである。この忠言は別して婦人にまで與へらるべきである。とり分けあらゆる假說が氣のきいたもの、アットラクティイヴなもの、元氣づけるもの、力づけるものの印象を與へる場合、その犧牲になることを免れないものとしての婦人にまで。けにより嚴密に檢覈して見れば、すべての教育ある人々のずゐぶん大なる部分が今日尙ほある思想家からして確信を欲求してゐる。そして確信のほかの何物をも欲求してゐない。またただ少數の人々だけが確實を要求してゐる。前者は力强く持つて行かれることを欲求する――それによつて自ら力の增進を獲得するために。少數の後者は個人的利益や右の力の增進なぞを無視するところの事實的興味をのみもつてゐる。前者の優勢なる階級は到處に當てにされる――思想家が自ら天才としてふるまひ、かくして權威を有するより高き物のごとく自らを處するときには。さうした種類の天才が確信の熱を支持し、科學の細心謙遜なる心に對する不信用をよびさます限りに於て、それは眞實

の敵である――いかばかりそれが自らを眞實の求愛者のごとく思つてゐようとも。

六三六

勿論、そこには天才のまるつきり別な種屬もある、卽ち正義の天才といふのもある。そして私はそれを、如何なる哲學的、政治的、乃至藝術的天才より、より低く評價する氣にはどうしてもなれない。その特色は衷心からの反感を以て、事物の批判を昏惑させるところのあらゆる物を避けて行くと云ふ點にある。乃ちそれは確信の敵である。なぜと云つて、それは各の者にまで、生きたものであらうとも死んだものであらうとも、現實的なものであらうとも想像上のものであらうとも、彼自らのものを與へようと欲するから――そしてその爲めにそれは純粹に認識せねばならぬ。さればそれは各の事物を最善の光の中に置き、注意深き目を以てそのまはりをまはる。最後にそれはその敵手に、盲目の或は近視眼の『確信』(男子等がそれを呼ぶごとく――婦人等にあつてはそれが『信仰』と云はれる)に與へるに、確信に相應したものを以てする――眞實のために。

六三七

欲情から意見が成長して來る。精神の懶惰はそれらの意見が確信にまで硬化するのを許す。しかしながら、自らを自由な、休息なき、生々した精神として感ずる人は、不斷の變化によつてこの硬化を防止する。そして彼がもし全然思考するところの雪達摩であつたならば、彼は何等の意見をも有しないで、むしろただ「きつと」と精密に計量されたる「多分」とをのみ頭の中に有するであらう。しかしながら、混合兒であるところの我々は、或るときは情火で以て熱しられ、或るときは理知で以て冷されるところの我々は、我々が承認する唯一の女神として、正義の前に跪づかうと思ふ。我々の中なる火は通例我々を不正にし、あの女神の目にまで不淨にする。この情態に於て我々は彼女の手をとることを許されてゐない。そして彼女の適意のまじめな微笑は決して我々の上に横はらない。我々は彼女を我々の生活のエエルをかけたイジスの女神として崇敬する。我々は耻ぢながら彼女へ我々の苦痛を贖罪及び犧牲として提供する――火が我々を燒き、燒き盡さうとするときに。我々がすつかり燒き盡され灰にされてしまふことから我々を救ふのは理智である。それは折々我々を正義の犧牲壇から引き去り、我々を石綿の衣服に包んでしまふ。火から釋放され、理智によつて强ひられて、我々はやがて黨派の變移を通じて、意見から意見へすすむ――兎に角裏切りされ得べき、そのくせ罪過の感情を伴はぬあらゆる事物の高貴なる裏切者として。

六三八

漂泊者。――多少なり理性の自由に到達したほどの人は、此の上に自らを漂泊者としてのほか何物としても感ずることが出來ない。一の最終目的へ向つて旅をしてゐるものとしてさへも感ずることが出來ない。なぜと云つて最終目的なぞと云ふごときものはないのだから。しかしながら、彼はもとより、世界に於て實際起るところのすべての物に對して目をあけてゐようとねがふ。それ故彼はその心をいかなる個々の事物へもあまりに堅く拘着することが出來ない。彼は變化と推移とに悅びを取るところの、何等かの漂泊者的なものを彼自らの内にもつてゐなければならぬ。勿論かくのごとき人には惡しき夜々が來るであらう――彼が疲れて來たとき、そして彼に休息を提供すべき市の門が閉ぢられてゐるのを見出すとき。恐らく彼は見出すであらう――その上、東方諸國に於けるごとく、沙漠が市の門まで屆いてゐること、猛獸が或は近く或は遠く咆え立てること、一陣の强風が吹き起ること、盜賊が彼の猛獸を掠めて行くことを。やがて恐ろしい夜が、沙漠の上の第二の沙漠のごとく、彼の上へ下つて來る。そして彼の心は漂泊をいやになつて來る。やがて朝の太陽が怒の神のごとく燃えながら彼の上に登るとき、市の門が開かれるとき、彼はその内に住する者共の顔に、門の外に於けるよりも、恐らく更により多くの沙漠を、汚穢を、欺瞞を、不安を見るであらう。そして晝は夜よりも殆んどより惡いのである。かくのごときことがこの漂泊者の上に起るかも分らない。しかしながらやがてその償ひとしてほかの土地の悅ばしき朝と晝とがやつて來る。そのとき彼は夜明の灰色の中に、山の霧の間に、彼に近くミュウゼンの群が踊り過ぎるのを見る。そののち午前の魂の均齊の中に、彼は靜かな樹の下をさまよひ歩く。その樹の梢や葉隱れからあらゆる善く且つ朗らかな事物が彼へ投げつけられる。それらのすべての自由なる精神――彼等は山や、森や、寂寥の中に處を得てゐる、また漂泊者自らのごとくその半ば快活な、半ば思慮深き仕方に於て、漂泊者であり哲學者である――の贈物が投げつけられる。早曉の祕密から生れて、彼等は如何にして、日が十時と十二時との間に、左樣に淸らかな、透明な、華やかに朗かな容貌をもち得るかをについて思ひ沈む。彼等は午前の哲學を求める。

友人の間に

後曲

一

互に默するときは佳し、
互に笑ふときは更によし——
絹布のごとき滑らかなる天の下に、
苦を敷き書物を枕に、
樂しく聲を擧げて友と笑へば、
白き齒をのぞかせつつも。

我にして善くなさば、我等は沈默せんとする。
我にして惡しくなさば、則ち我等は笑はんとする。
さていよいよより惡しくし、
より惡しくし、より惡しく笑はんとする、
我等の墓穴に落ち行くまで。

友よ？　げに！　かくのごとくになるべきか？
アアメン！　再び我等の會ふときまで！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

二

如何なる辯解も！　如何なる宥恕もあらず！
汝等愉快なる、胸ひろき者等よ、
この愚かなる書物に耳と
心と避難所とを許し與へよ！
我を信ぜよ、友よ、我が愚かさの、
我が呪咀にならざりしことを！

我が見出すもの、我が求むるもの！？
そはかつて書物の中にありしか？

今我に於て馬鹿者の仲間を尊敬せよ！
この馬鹿の書物より學べ、
如何にして理性が『理性へ』來たかを？

かく、友よ、かくのごとくになるべきか！
アアメン！　再び我等の會ふときまで！

＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊

大正五年十月四日印刷
大正五年十月[illegible]日發行

定價金壹圓六拾錢

ニイチエ全集 (1)

飜譯者　生田長江

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町中の丸
新潮社
電話(番町)二、二二三番
振替(東京)一、七四二番

印刷所　東京市神田區宮本町五番地
電話下谷五九〇八番
新潮社印刷部
(印刷者)　高橋治一

ニイチェ全集　第二編

■人間的な餘りに人間的な

（下卷）

近刊——目下印刷中

森鷗外氏序　生田長江氏譯

■ニイチェ著　ツアラトゥストラ

五版裁切
第六版

總洋布最上製
定價一圓八十錢
小包料十二錢

是れ輓近歐洲思想界の巨人ニーチェの代表的著作也。彼の奔放なる詩歌や、深刻なる哲學や、悲壯なる宗教や、悉く收めて此の中に在り。以てニーチェの眞面容を知る可く、以て輓近思潮そのものゝ眞髓を知る可き也。

世評の一斑

早稻田文學曰く、生田長江氏が永き努力の結果として玆に譯出した「ツアラトゥストラ」の一卷はニイチェの偉大なる精神生活の代表であると同時に、又以て十九世紀末思潮の代表的宣言である。ニイチェの思想は最近歐洲の思想界に驚くべき動力を與へたのは云ふ迄もないがゴーリキーの如き、ダンヌンチオの如きを始として、ニイチェ思想に動かされて現れた近代作家も決して少くはない、ニイチェの思想は一面近代文藝の一大源泉を成して居る。我國でも高山樗牛を始めニイチェの思想を傳へようとした人は多いが、両も多くはその精髓を選んだものでない。ニイチェの思想は最近自然主義思潮によつて覺醒された我が思想界にして初めて傳ふべきである。生田氏が此飜譯は誠に時を得たものと云はねばならぬ。

妹の見たるニイチェ

磯部泰治譯

特製美本
定價七十五錢
郵送料八錢

ニイチェの忠實なる伴侶として、生涯を其の看護に捧げ、殆どニイチェの半身とも云ふ可かりし其妹が、人としてのニイチェを寫し、性行經歷等を傳へたるもの也。ニイチェ自身の表白は、よく彼の思想を語るも、其の思想の由つて育まれたる實際生活を知らずんば、よく其の思想を了解するの十分なるを得んや。「超人」の哲學はいかにして生まれたる乎、「ツアラトゥストラ」の「大獅子吼」はいかにしてなされたる乎。眞相は裏面に於て示さる。乞ふ就て之を本書に看よ。

■ルツソオ著　懺悔錄　大杉榮氏譯　■定價一圓八十錢　郵送料十二錢

■ダンヌンツイオ著　死の勝利　森田草平氏序　生田長江氏譯　■定價一圓四十錢　郵送料十二錢

■ドストエフスキイ著　赤い部屋　阿部次郎氏序　江馬修氏譯　■定價一圓六十錢　郵送料十二錢

■同　著　地獄　江馬修氏譯　■定價七十五錢　郵送料八錢

■ダスタエフスキイ著　罪と罰　昇曙夢氏序　中村白葉氏譯　■定價一圓五十錢　郵送料十二錢

■同　著　白痴（全八冊六冊迄發行）　米川正夫氏譯　■一冊二十五錢宛　送料一冊四錢宛

■ロマン・ロオラン著　トルストイ　成瀨正一氏譯　■定價九十五錢　郵送料八錢

■トルストイ著　戰爭と平和　昇曙夢氏　米川正夫氏譯　■全部一冊七十五錢　六冊迄送料八錢

■同　著　我が宗教　生田長江氏譯　■定價七十錢　郵送料八錢

■同　著　我が懺悔　相馬御風氏譯　■定價七十錢　郵送料八錢

■同　著　人生論　相馬御風氏譯　■定價二十五錢　郵送料四錢

■同　著　性慾論　相馬御風氏譯　■定價二十五錢　郵送料四錢

□飜譯書類□

■ダーキン著　種の起原　大杉榮氏譯　■定價一圓二十錢　郵送料八錢

■ゲエテ著　エルテルの悲み　秦豐吉氏譯　■定價二十五錢　郵送料四錢

■タゴール著　暗室の王　磯部泰治氏譯　■定價六十錢　郵送料八錢

■ミュッセ著　戀より戀へ　相馬御風氏　野尻抱影氏譯　■定價七十錢　郵送料八錢

■ツルゲネフ著　散文詩　草野柴二氏譯　■定價三十五錢　郵送料四錢

■同　著　はつ戀　生田春月氏譯　■定價二十五錢　郵送料四錢

■イブセン著　人形の家　中村吉藏氏譯　■定價二十五錢　郵送料四錢

■スタンレー・ホートン著　村の祭　坪內士行氏譯　■定價七十錢　郵送料八錢

■ピエルロチ著　お菊さん　野上臼川氏譯　■定價九十錢　郵送料八錢

■同　著　鄉愁（守備兵の話）　後藤末雄氏譯　■定價一圓十二錢　郵送料十二錢

■同　著　日本印象記　高瀨俊郎氏譯　■定價二十五錢　郵送料四錢

■シエクスピイヤ著　沙翁名作選　久米正雄氏譯　■定價一圓八錢　郵送料八錢

□創作書類□

武者小路實篤氏■小さき世界（傑作選集）■定價一圓三十錢 郵送料八錢

有島生馬氏著■改版南歐の日（短篇集）■定價一圓 郵送料八錢

江馬修氏著■受難者（新作長篇）■定價一圓三十錢 郵送料十二錢

夏目漱石氏著■色鳥（傑作選集）■定價一圓二十錢 郵送料十二錢

長田幹彦氏著■鴨川情話（短篇集）■定價八十錢 郵送料八錢

上司小劍氏著■父の婚禮（短篇集）■定價八十五錢 郵送料八錢

德田秋聲氏著■奔流（長篇）■定價九十五錢 郵送料八錢

島崎藤村氏著■戰爭と巴里（紀行感想）■定價七十五錢 郵送料八錢

島崎藤村氏著■破戒（縮刷（長篇））■定價六十八錢 郵送料八錢

島崎藤村氏著■家（縮刷（長篇））■定價八十五錢 郵送料八錢

國木田獨歩氏著■運命（縮刷（短篇集））■定價四十五錢 郵送料八錢

田山花袋氏著■時は過ぎゆく（新作長篇）■定價一圓二十錢 郵送料十二錢

□創作書類□

□代表的□

名作選集

——明治大正に亘れる新文藝の精華にして、何れも不朽の寶玉也。

島村抱月 生田長江 馬場孤蝶 風間八宏 共選 中澤臨川

▼特製函美本 ▼一册三十五錢 ▼送料四錢

第一■牛肉と馬鈴薯（附）歎かざるの記 國木田獨歩

第二■坊っちやん 夏目漱石

第三■蒲團 田山花袋

第四■透谷選集 北村透谷

第五■春（上） 島崎藤村

第六■春（下） 島崎藤村

第七■わが袖の記 高山樗牛 たけくらべ 樋口一葉

第八■爛れ 德田秋聲

第九■平凡 二葉亭四迷

第十■高野聖 泉鏡花

十一■何處へ 正宗白鳥

十二■今戸心中 廣津柳浪

十三■恥溺 岩野泡鳴

十四■明治詩歌選 詩壇六家

十五■戀ざめ 小栗風葉

十六■別れた妻 近松秋江

十七■はつ姿 小杉天外

十八■お艶殺し 谷崎潤一郎

十九■俳諧師 高濱虛子

二十■煤煙（上） 森田草平

廿一■煤煙（下） 森田草平

賣行益々急——各編悉く增版全部取揃あり

中澤臨川　生田長江共編

近代思想十六講

——背皮最上製……大判五百頁——

定價壹圓五拾錢■小包料八錢

■近代思想の概觀……
■レオナルド・ダ・ヴィンチと文藝復興……
■第一人者ルツソオ……
■ニイチエの超人の哲學
■スチルナアの個人主義
■トルストイの人道主義
■ドストイエフスキイの愛の福音……
■イブセンと第三帝國……
■ダアヰンと進化論……
■ゾラの自然主義……
■フロオベルと懐疑思想
■ジエムスの實用主義……
■オイケンの理想主義……
■ベルグソンの流動哲學
■梵の行者タゴオル……
■ロマン・ロオランの眞勇主義

以上十六講、概ね近代思想の諸相を盡す。現代思想界の權威者たる中澤生田兩先生がその蘊蓄を傾けたるもの、簡切明到、一讀して直ちに是等の人と思想と、而して時勢とを了せしむ。しかも講述極めて平易、趣味深き講話體を以てしたれば、何人も難解の憂無かる可く、最も速成的に、而して最も完全に近代思想の大體に通ぜんと欲するものゝ爲に、絶好無二の一卷たる可きを信ず。世の眞面目なる研究者の前に捧ぐ。

近時の出版界稀有の歡迎と稱せらる

第六版又々賣切れ□第七版出來

タゴール序、井上文學博士序、境野黃洋氏序

■優波尼沙土物語

木村龍寛著

總洋布最上製
價壹圓八拾錢
郵送料十二錢

優波尼沙土は印度哲學の精髓を示せる古聖典にして、「梵」の眞意義を說けるもの。タゴールを生めるは實に本書にして、東方精神の源は此裡に祕めらる。木村氏之を譯し之を解說して剩すなし。

375
3

終